

第5章 総括

第1節 櫃石島ガンド浜遺跡出土の凸帯文土器

香川県内において、縄文時代晩期の凸帯文土器および凸帯文土器系土器が出土した遺跡はかなりの数にのぼるが、1・2点の破片としての出土であり、まとまって出土した遺跡は林・坊城遺跡と坂出市の櫃石島に所在するガンド浜遺跡の2遺跡を数えるに過ぎないのが現状である。ガンド浜遺跡は林・坊城遺跡に先立つ昭和61年度に坂出市教育委員会が調査主体となって、香川県教育委員会の調査指導の下に発掘調査が実施された。すでに概報が刊行されているが土器の一部が報告されているのみであり、器種組成などについては未だ全体像が明らかにされていない。ガンド浜遺跡の凸帯文土器は林・坊城遺跡の凸帯文土器を考える上で重要な資料であり、比較・検討を目的として資料化し、本報告書に所収した。

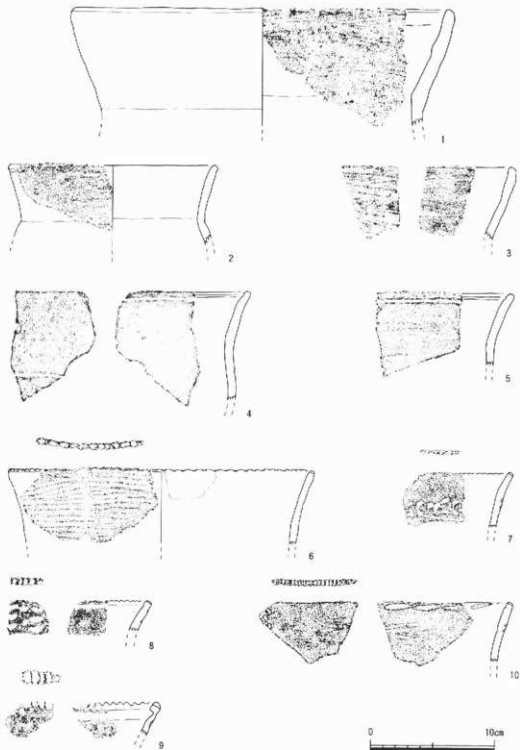
ガンド浜遺跡は坂出市櫃石町家部に所在し、県道櫃石島線建設に伴って昭和61年10月21日から12月8日までの期間で、150㎡を対象に発掘調査が実施された。櫃石島の北東部にある小さな入江に広がる低地部分で、調査区は浜のはほぼ中央部にあたる。調査の結果、縄文時代から鎌倉時代の複合遺跡であることが判明した。

土層は6層に大別され、耕作土下の第2層（黒褐色土）は中世遺物と二次堆積と思われる古墳時代の製塩土器の包含層である。人頭大から上半身大の塊石を積み上げた石組遺構を検出しており、現海岸線と平行に築かれていることなどから護岸施設と考えられる。付近から出土した大量の土師質土器から、鎌倉時代後期から南北朝時代の年代が想定される。

第3層（黒色土）・第4層（やや紫がかかる黒色土）・第5層（灰黒色砂質土）は縄文時代後期土器から晩期凸帯文土器までの包含層であるが、各層が単一形式の包含層とはなっておらず混合層となっている。縄文土器は中津式土器相当の磨消縄文土器・彦崎KⅠ式の緑帯文土器・凸帯文土

第109表 ガンド浜遺跡出土土器①観察表

遺物番号	器種	左章 (cm)	遺 型		凸 帯		輪 郭 形	輪 郭 材	内 面 花	その他	色 澤		胎 土	残存度
			外面	内面	断面形	高さ					位置	外面		
1	深鉢	(20.4)	帯型(黒褐色)	帯型(黒褐色)	---	---	丸	---	---	---	黒	黒	1~2cm程度	1/6
2	深鉢	(16.6)	ナブ・深溝	ナブ・深溝	---	---	丸	---	---	---	黒地	黒地	2cm程度以下	1/6
3	深鉢	---	赤赤貝系灰	赤赤貝系灰	---	---	丸	---	---	---	黒	黒	1cm程度以下	破片
4	深鉢	---	ナブ	ナブ	---	---	底	○	(赤・黒)地	---	赤褐色	赤褐色	1cm程度	破片
5	深鉢	---	ナブ・ナブ?	ナブ・ナブ系深溝	---	---	丸	○	(赤)地	---	赤白濁	赤白濁	2cm程度	破片
6	深鉢	(21.2)	二枚貝系灰	ココナブ	---	---	丸	○	(赤)地	---	黒~20%	赤地	1~2cm程度	1/6
7	深鉢	---	ナブ・深溝	ナブ	---	---	底	○	(赤・黒)地	---	黒地	黒地	1cm程度以下	破片
8	深鉢	---	ナブ	ナブ	---	---	丸	○	(赤)地	---	赤地	赤地	1~2cm程度	破片
9	深鉢	---	ナブ	ナブ	---	---	丸	○	(赤)地	---	赤地	赤地	1cm程度	破片
10	深鉢	---	ナブ・ナブ系深溝	ナブ・ナブ系深溝	---	---	底	○	(赤)地	(赤・黒)地	赤地	黒地	1cm程度	破片



第179図 ガンド浜遺跡出土土器①

器の3つに大別できる。遺構としては第4層上面から掘り込まれた一辺2m、深さ0.3mの方形土坑を検出している。柱穴は検出されず住居跡との断定はできなかったが、縄文時代晩期に属するものと考えられている。

以上がガンド浜遺跡の概要である。このうち第3層から第5層で出土した縄文晩期の凸帯文土器についてのべていく。器種は深鉢と浅鉢の2種類であり、実測して凶化できた土器片は全部で840点ほどにのぼるが、その全てを取録することはできないため、深鉢・浅鉢でそれぞれ器形でタイプ分けしたの中から代表的なものを抽出して取録した。(第169～177図)

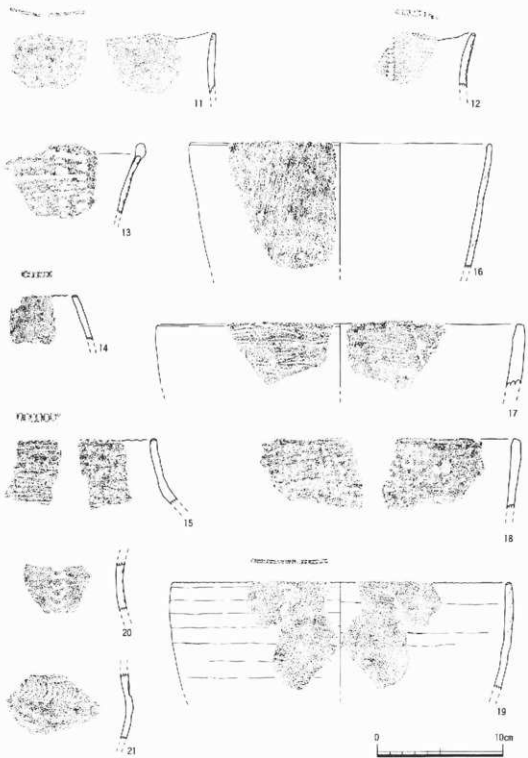
1～13は刻目凸帯文を施さない屈曲型の深鉢の口縁である。頸部に屈曲し外方にむかって開く器形を呈している。口縁端部は丸く仕上げるものが多く、口縁端部に刻目を施すもの(6～12)もみられる。口縁部内面に沈線をめぐらすもの(4・5・9)も存在するが、10・11は口縁端部内面にヘラ状工具の先端で連続する刺突文を刻んでいる。頸部と胴部の境は弱い稜をなすものが多いが、沈線をめぐらせるもの(4)みられる。調整は内外面ともに擦過調整が多いが、外面には条痕風擦過、内面にはナデ風擦過が多用される。外面に文様を施すものもみられ、7は頸部の外面に半截竹管状工具によるC字形の爪形文を施している。8・10・12・13は口縁端部から垂下する爪形文を施している。11・12は波状口縁をなすもので、13は突起を貼り付けており、突起の下から垂下する爪形文を施している。

22～24は刻目を施さない凸帯をめぐらせた屈曲型の深鉢の口縁である。調整はいずれもナデ調整で仕上げられており、とくに24は内外面とも部分的だがミガキ調整が残っており丁寧に仕上げられている。いずれも口縁端部に刻目は施されていないが、23の口縁部内面には沈線が1条めぐらされている。

25～47は刻目凸帯文をめぐらせた屈曲型の深鉢の口縁である。肩部を境として肩部以上(頸部)を丁寧にナデ調整し、肩部以下(胴部以下)を粗く擦過調整するものが多いが、外面全体に条痕・条痕風擦過調整を施すものもみられる。口縁端部は丸く仕上げているものが多く、また端

第110表 ガンド浜遺跡出土土器②観察表

遺物番号	器種	法華 (H)	遺 跡		凸 帯			頸部 形状	口縁 形状	その他	色 澤		取 上	残存数
			外部	内面	彫刻形	刻目	行渡				外部	内面		
11	深鉢	—	丁重なナデ	ミガキナ	—	—	丸	○	跡部(4)・跡部(4)・跡部(4)	赤褐色	赤～赤褐色	1～2割程度	破片	
12	深鉢	—	二重目ナデ	ナデ	—	—	丸	○	跡部(5)・跡部(2)	暗褐色	暗褐色	2割程度	破片	
13	深鉢	—	ナデ・条痕風擦過	ナデ・ナデ	—	—	丸	○	(H)跡部(4)・跡部(2)	赤褐色	白褐色	1～4割程度	破片	
14	深鉢	—	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	—	—	丸	○	—	赤褐色	赤褐色	1～2割程度	破片	
15	深鉢	—	(赤褐色)条痕 擦過	擦過	—	—	丸	○	—	赤褐色	赤褐色	1～2割程度	破片	
16	深鉢 (22.8)	—	ハタ目風擦過	条痕	—	—	丸	—	(H)跡部(1)跡部	暗褐色	灰褐色	2割程度	1/16	
17	深鉢 (29.4)	—	条痕	条痕	—	—	丸	—	—	暗褐色	暗褐色	2割程度	1/13	
18	深鉢	—	1割中風擦過	ナデ	—	—	丸	—	—	赤褐色	赤褐色	1～2割程度	破片	
19	深鉢 (27.0)	—	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・ケズリ風擦過	—	—	丸	○	(H)跡部(2)跡部(2)	赤褐色	暗褐色	2割程度	1/16	
20	深鉢	—	擦過	ナデ	—	—	丸	—	—	赤褐色	赤褐色	2割程度	破片	
21	深鉢	—	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	—	—	丸	—	跡部(4)・跡部(1)跡部(1)	赤褐色	赤褐色	1割程度	破片	



第180図 ガンド派遺跡出土土器②

部に刻目を施すものが多い。25～27は波状口縁の深鉢でいずれも口縁部内面に沈線を施している。

28～47は刻目凸帯文をめぐらせた屈曲型の平縁の深鉢である。口頸部の外反の度合によって、口頸部が大きく外反するもの、直立に近いもの、内傾するものにさらに細分することが可能である。28は口縁端部からやや下がったところに刻目凸帯を貼り付けており、頸部と胴部の境で調整が異なっている。29は半截竹管状工具で刻目を施している。31・36・37・38・41・42は口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。34は屈曲部からやや下がったところに逆C字形の爪形文を施している。40は口頸部が内傾する器形を呈し、外面に糸痕調整を施したのちへら描き文様を入れている。45は内傾しながら口頸部が内傾する器形を呈し、口縁端部内面を肥厚させている。46・47は胴部の最大径よりも口径の方が狭く、口がすぼまったような器形を呈する。口縁端部に接して断面が上三角形の刻目凸帯を貼り付けている。47の胴部には沈線が1条めぐらされている。46・47は深鉢が壺の影響を受けて変容した「深鉢変容壺」の可能性を持っている。

54～57は2条凸帯をめぐらせた屈曲型の深鉢である。54は口縁端部を面取りし、端部からやや下がったところに口縁部凸帯をめぐらせている。胴部凸帯の下に穿孔途中の孔が見受けられる。55～57は胴部凸帯の破片である。

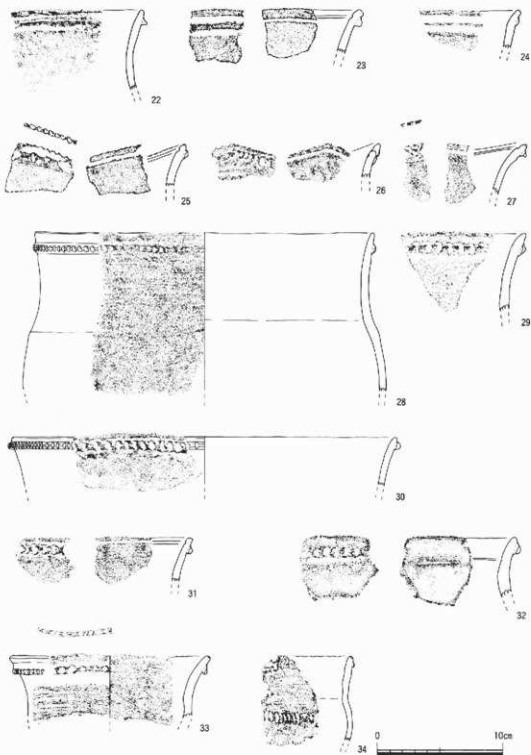
20・21は屈曲型の深鉢の頸部・屈曲部の破片である。20は深鉢の頸部で、外面に垂下する縦方向の爪形文を施している。21は深鉢の胴部付近で、逆C字形の爪形文を横方向に施している。

16～19は刻目凸帯文をめぐらさない砲弾型の深鉢である。口縁端部に刻目をもたないもの(16～18)と刻目を施すもの(19)がみられる。調整は比較的粗雑な感じを受けるが、16の外面の調整はハケ目風擦過が用いられている。

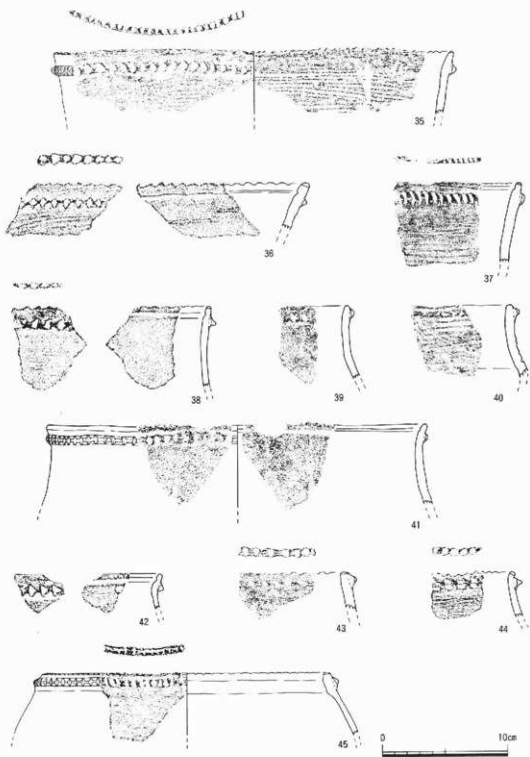
48～53は刻目凸帯文をめぐらせた砲弾型の深鉢である。50は口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。51・53の内面の調整にはハケ目風擦過がみられる。

第111表 ガンド浜遺跡出土土器③観察表

遺物番号	器名	法量 (cm)	調 整		凸 帯		口 縁	内 面	その他	色 澤		土 質	残存率
			外面	内面	断面形	位置				外面	内面		
22	深鉢	—	ナデ・丸口縁鉢	1/4幅刻目凸帯	三角	—	底	—	刻目凸帯	白陶	白陶	1600000	破片
23	深鉢	—	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	三角	—	底	○	口縁部・胴部	灰白陶	灰白陶	2600000	破片
24	深鉢	—	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	三角	—	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	1600000	破片
25	深鉢	—	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	三角	斜	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	1600000	破片
26	深鉢	—	ナデ	ナデ	扁平	斜	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	2600000	破片
27	深鉢	—	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	三角	斜	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	1600000	破片
28	深鉢	25.0	ナデ・丸口縁鉢	ナデ	三角	斜	底	—	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	2600000	1/4
29	深鉢	—	ナデ・丸口縁鉢	ナデ・丸縁	三角	斜	底	—	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	4600000	破片
32	深鉢	(30.4)	ナデ・ナデ	ナデ・丸縁	扁平	斜	底	—	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	1～3600000	1/6
33	深鉢	—	丁寧なナデ	ハケ目風擦過	三角	斜	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	1600000	破片
35	深鉢	—	磨滅のため不明	磨滅のため不明	三角	斜	底	—	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	2600000	破片
37	深鉢	15.5	(二枚目) 丸縁	ナデ・ハケ目風擦過	三角	斜	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	1600000	1/4
43	深鉢	—	軽い磨過・磨滅?	磨滅のため不明	扁平	斜	底	○	刻目凸帯	灰白陶	灰白陶	4600000	破片



第181図 ガンド兵遺跡出土土器③



第182図 ガンド浜遺跡出土土器④

第112表 ガンド浜遺跡出土土器④観察表

遺物 番号	器種	法量 (g)	調 整		凸 凹			縮 小 率	内 面 装 飾	その他	色 調		胎 土	残存度
			外面	内面	断面形	口径	底径				外面	内面		
25	深鉢	51.8	ナデ・二枚貝(帯紋)	ナデ・二枚貝(帯紋)	三角	押	0.7	丸	○	—	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	1/4
56	深鉢	—	ナデ・条痕の凸ナデ	ナデ・条痕の凸ナデ	三角	押	1.2	丸	○	—	茶褐色	茶褐色	1割程度	—
37	深鉢	—	ナデ・二枚貝(条痕)	ナデ・條痕	凸形	押	0.4	丸	○	(9)條紋	茶褐色	茶褐色	2割程度	破片
36	深鉢	—	ナデ・条痕風押通	ナデ	上三角	押	0.7	丸	○	(9)條紋(足跡)	白褐色	茶褐色	2割程度	破片
39	深鉢	—	ナデ	ナデ	凸形	押	0.1	丸	—	—	茶褐色	茶褐色	1割程度	破片
43	深鉢	—	ナデ・条痕風押通	ナデ・ケズリ風押通	三角	刺	0.2	丸	—	(9)條紋(足跡)	茶褐色	茶褐色	1割程度	破片
41	深鉢 (22.2)	ナデ・條痕	ナデ(條痕?)	ナデ(條痕?)	三角	刺	0.7	丸	—	—	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	1/15
42	深鉢	—	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ	三角	押	0.5	扁	○	(9)條紋	白褐色	茶褐色	1割程度	破片
43	深鉢	—	ナデ・ケズリ風押通	ナデ・條痕	三角	刺	0.1	扁	○	—	白褐色	茶褐色	1~2割程度	破片
41	深鉢	—	ナデ・ハナケ目風押通	ナデ	三角	刺	0.4	丸	○	印影(脚付)	茶褐色	茶褐色	1割程度	破片
44	深鉢 (23.5)	ナデ・ケズリ風押通	ナデ	ナデ	三角	押	0.3	扁	○	深鉢(足跡)の可成り	茶褐色	茶褐色	2割程度	1/12

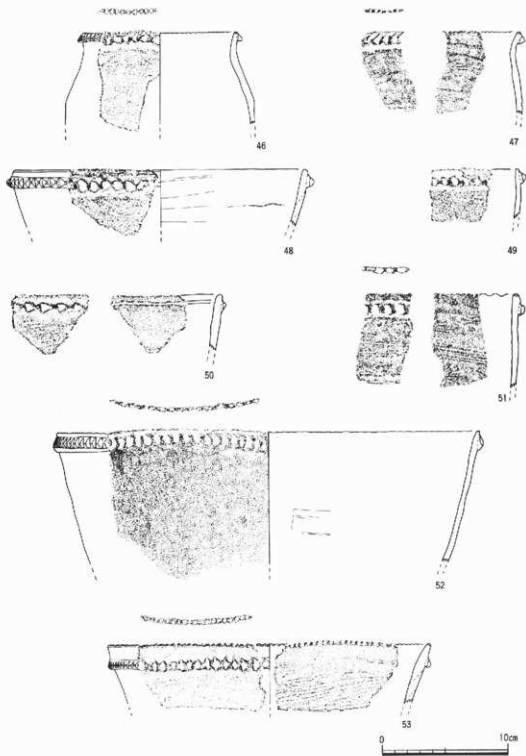
第113表 ガンド浜遺跡出土土器⑤観察表

遺物 番号	器種	法量 (g)	調 整		凸 凹			縮 小 率	内 面 装 飾	その他	色 調		胎 土	残存度
			外面	内面	断面形	口径	底径				外面	内面		
46	深鉢 (14.8)	(9)條紋(凸)風押通	ナデ	ナデ	上三角	押	0.1	丸	○	9割程度	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	1/12
47	深鉢	—	ナデ・ナデ	ナデ・ナデ(條痕)	三角	押	0.1	丸	○	9割程度(足跡)	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	破片
43	深鉢 (22.5)	ナデ・條痕	ナデ・ナデ風押通	ナデ	三角	刺	0.3	丸	—	—	茶褐色	茶褐色	2割程度	1/8
43	深鉢	—	ナデ・條痕	ナデ	三角	刺	0.2	丸	—	—	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	破片
50	深鉢	—	ナデ・上ガキ目風押通	ナデ	三角	押	0.4	丸	○	(9)條紋(足跡)	茶褐色	茶褐色	2割程度	破片
51	深鉢	—	ナデ・ナデ・條痕	ナデ・ハナケ目風押通	凸形	刺	0.7	丸	○	1割程度(足跡)	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	破片
33	深鉢 (21.5)	ナデ・ケズリ風押通	條痕(ナデ)	條痕(ナデ)	三角	刺	0.1	丸	○	—	茶褐色	茶褐色	2割程度	1/4
53	深鉢 (25.4)	ナデ・条痕風押通	ナデ・条痕風押通	上三角	刺	0.3	丸	○	9割程度	—	茶褐色	茶褐色	2割程度	1/4

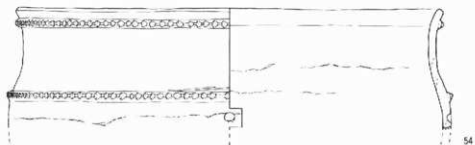
第114表 ガンド浜遺跡出土土器⑥観察表

遺物 番号	器種	法量 (g)	調 整		凸 凹			縮 小 率	内 面 装 飾	その他	色 調		胎 土	残存度
			外面	内面	断面形	口径	底径				外面	内面		
54	深鉢 (34.2)	ナデ・條痕・條	ナデ	ナデ	三角	押	1.7	扁	—	2割程度(足跡)	茶褐色	茶褐色	2割程度	1/3
55	深鉢	—	ナデ	ナデ	(三角)	(押)	—	—	—	割程度	茶褐色	茶褐色	1割程度	破片
56	深鉢	—	條痕・ナデ	ナデ風押通	(三角)	(押)	—	—	—	割程度	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	破片
57	深鉢	—	ナデ・條痕	ナデ	(三角)	(押)	—	—	—	割程度	茶褐色	茶褐色	1~2割程度	破片

遺物 番号	器種	法 量 (g)	調 整		凸 凹			縮 小 率	内 面 装 飾	その他	色 調		胎 土	残存度
			口径	底径	断面形	外面	内面				外面	内面		
58	縄文 浅鉢 (25.0)	—	三角	三角	凸形	(外)刺突文・(内)刺突文	—	—	—	茶褐色	茶褐色	1割程度	1/4	
59	縄文 浅鉢 28.4	—	三角	三角	凸形	凸形・凸形・(内)刺突文	—	—	—	茶褐色	茶褐色	1割程度	1/4	
59	縄文 浅鉢	—	三角	三角	凸形	凸形・凸形・(内)刺突文	—	—	—	茶褐色	茶褐色	1割程度	破片	
61	縄文 浅鉢 (27.4)	—	三角	三角	凸形	凸形(足跡)・(外)刺突文	—	—	—	茶褐色	茶褐色	2割程度	1/12	



第183図 ガンドラ遺跡出土土器⑤



54



55



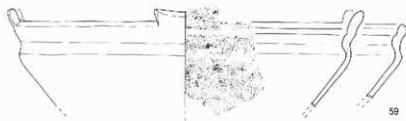
56



57



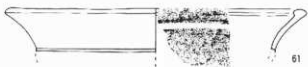
58



59



60



61



第184図 ガンド系遺跡出土土器⑥

58～60は口縁端部に凸起を貼り付けた浅鉢である。58は凸起の内面に方形の刺突文を施し、外面の口縁部との接線にヘラ状工具の先端で刻んだような刺突文を施している。59・60はリボン状凸起を貼り付け、口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。いずれも調整は内外面ともミガキ調整である。

61は口縁部内面を肥厚させた浅鉢で、屈曲部外面に沈線を1条めぐらせている。

62～64は屈曲する肩部から反外する口頸部が長い浅鉢である。62は口縁端部より一つ下の粘土紐を外方へ突出させて凸帯とし、さらに粘土紐をもう一段付け足して口縁部を形成している。凸帯には刻目は施されていない。調整は外面の口頸部が横方向のミガキ、胴部が条痕、内面が横方向のミガキで仕上げられている。63は口縁部に凸帯をもたないが、内面に沈線を1条めぐらせている。64は62・63とくらべて屈曲部がかなり緩やかであり、外面に凹縁状の段をめぐらせている。口縁部内面に沈線を1条施す。

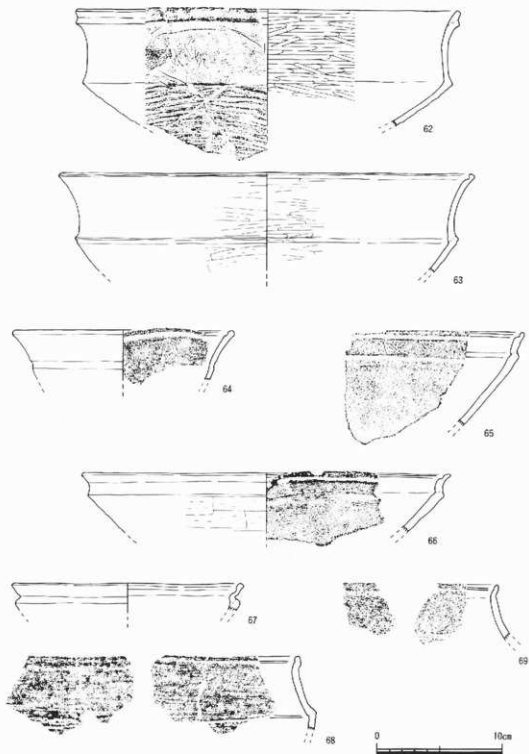
65～67は屈曲する肩部から反外する口頸部が短い浅鉢である。65は口縁部内面と屈曲部内面にそれぞれ沈線をめぐらせており、波状口縁浅鉢の可能性もある。67はいわゆる鐘形口頸部を有する浅鉢である。

69～71は屈曲する肩部から口頸部が内傾する浅鉢である。69は長い頸部から短い口縁部が外反し、口縁部内面に沈線をめぐらせている。壺の可能性も残されている。68・70は内外面ともに丁寧にミガキ調整で仕上げられている。71は屈曲部から直線的に内傾し、口縁端部に接するように刻目を施さない凸帯を貼り付けている。外面凸帯下と屈曲部直上にそれぞれ2本の沈線を施し、口縁部内面にも沈線を1条施している。調整は外面胴部がミガキ調整、内面頸部は横方向のミガキ、内面胴部はハケ目風擦過である。

72～78は碗・皿形の浅鉢である。口縁端部の刻目の有無、口縁内面の沈線の有無などでさらに細分することができる。72・73は端部に刻目がなく沈線もないものである。74・75は端部に刻目を施すが沈線はないものである。76は刻目はないが内面に沈線を2条施している。77・78は刻目をもち内面に沈線を1条施している。調整は内外とも擦過調整のものが多く、内面をミガキやナゲ調整で仕上げるものもみられる。

第115表 ガンド浜遺跡出土土器の観察表

遺物 番号	器種	定 量 (g)			調 整		そ の 他	色 澤		胎 土	透 明 性
		口縁	底縁	器底	外面	内面		外面	内面		
52	縄文 浅鉢	30.1	—	—	ナゲ・ミガキ・条痕	ナゲ・ミガキ	内面(赤・白・赤・白)	赤褐色	黒褐色	黒	2/4
53	縄文 浅鉢	(32.0)	—	—	ミガキ・擦過	ミガキ	(内)沈線1条・沈線状の段	赤褐色	黒褐色	黒	1/3
54	縄文 浅鉢	(18.5)	—	—	仔・(仔)・條	ナゲ・ナゲ	(外)凹縁状のもの・(内)沈線1条	赤褐色	黒褐色	黒	1/6
55	縄文 浅鉢	—	—	—	沈線・(沈線)・(沈線)	ミガキ・ミガキ	沈線・(沈線)・(沈線)	赤褐色	黒褐色	黒	—
56	縄文 浅鉢	(25.4)	—	—	沈線・(沈線)・沈線	ミガキ・ミガキ	(内)沈線1条	赤褐色	黒褐色	黒	1/7
57	縄文 浅鉢	(17.7)	—	—	ナゲ	ナゲ	鐘形口縁	赤褐色	黒褐色	黒	1/10
58	縄文 浅鉢	—	—	—	ミガキ・条痕	ミガキ	鐘形口縁・(沈線)・(沈線)	赤褐色	黒褐色	黒	2/10
59	縄文 浅鉢	—	—	—	ナゲ・擦過	ナゲ	鐘形口縁・(沈線)・(沈線)・(沈線)	赤褐色	黒褐色	黒	—



第185図 ガンド浜遺跡出土土器⑦

79~82は肩部で屈曲する浅鉢の肩部の破片である。81は方形浅鉢の屈曲部である。外面の調整は条痕調整である。

83~85は深鉢の底部である。丸底気味のものや凹底がみられる。87は浅鉢の平底である。

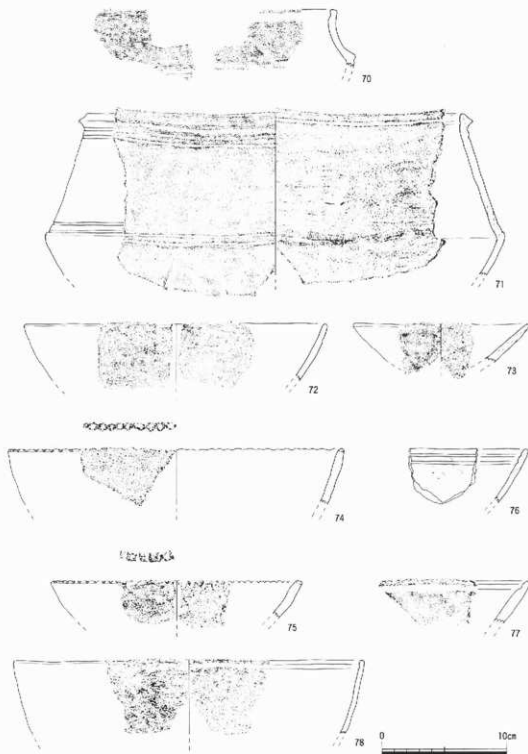
以上、ガンド浜遺跡から出土している縄文時代晩期の凸帯文土器についてタイプ別に概観してきた。それぞれのタイプの数量等については「第3節 縄文時代晩期の凸帯文土器について」のところで報告する。

第116表 ガンド浜遺跡出土土器⑧観察表

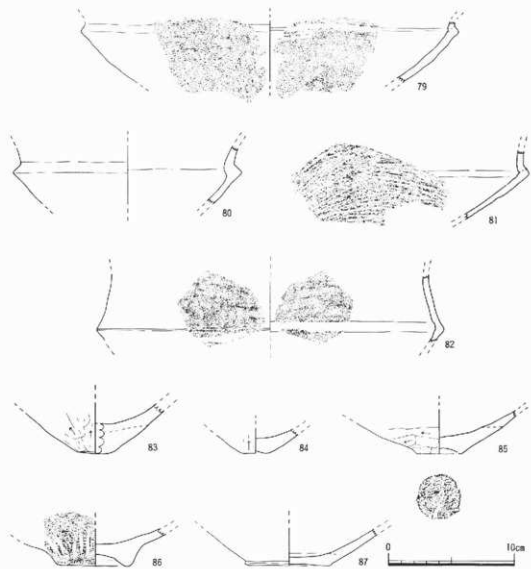
遺物番号	器種	法 量(m)			調 整		く の 他	色 調		取 上	遺存率
		口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
71	縄文 浅鉢	—	—	—	ミガキ・条痕調整済	ナデ	(内)丸底(1条)	軽赤褐色	軽赤褐色	1x215x4	破片
71	縄文 浅鉢	29.0	—	—	軽肌(ナデ)(19)	(内)丸底調整済	(内)丸底(1条・1)・(外)条痕(1)	軽赤褐色	軽赤褐色	2x217x4	1/14
72	縄文 浅鉢	(24.0)	—	—	ナデ・軽いナデ	ナデ・ミガキ		軽	赤褐色	1x215x4	1/12
73	縄文 浅鉢	(13.0)	—	—	ナデ・擦過	ナデ・擦過		赤赤褐色	赤赤褐色	1x215x4	1/8
74	縄文 浅鉢	(16.0)	—	—	ナデ・擦過	軽いナデ	調整済(1)	軽赤褐色	赤褐色	1~3x215x4	1/13
75	縄文 浅鉢	(19.3)	—	—	ナデ(調整済)(1)	擦過	調整済(1)	軽	赤褐色	2x215x4	1/12
77	縄文 浅鉢	—	—	—	ナデ・ナデ風擦過	ナデ・ミガキ	(内)丸底(2条)	赤褐色	赤褐色	1x215x4	破片
77	縄文 浅鉢	—	—	—	擦過	ミガキ風擦過	(内)丸底(1条・赤色磨研系)	赤褐色	赤褐色	2x215x4(破)	破片
78	縄文 浅鉢	—	—	—	擦過	ナデ	(内)丸底(1条)	軽(1)軽	赤白褐色	2x215x4	1/10

第117表 ガンド浜遺跡出土土器⑨観察表

遺物番号	器種	法 量(m)			調 整		く の 他	色 調		取 上	遺存率
		口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面		
79	縄文 浅鉢	(28.1)	—	—	ナデ・ケズリ風擦過	ナデ	軽赤褐色	赤褐色	白褐色	1x215x4	1/13
80	縄文 浅鉢	—	—	—	軽肌(ナデ)(調整済)	ナデ	軽赤褐色	軽赤褐色	軽赤褐色	1x215x4	1/8
81	縄文 浅鉢	—	—	—	ナデ・条痕	ナデ・擦過	軽赤褐色・方形浅鉢の屈曲部	赤~軽	赤褐色	1x215x4(破)	破片
82	縄文 浅鉢	—	—	—	ミガキ・擦過	ミガキ・ナデ	軽赤褐色・赤色磨研系	軽	軽赤褐色	1x215x4	1/12
83	縄文 深鉢	3.0	—	—	ケズリ風擦過	ナデ	丸底	赤褐色	赤褐色	2x215x4	1/11
84	縄文 深鉢	—	1.7	—	ケズリ風擦過	ナデ	丸底・凹底(軽肌)(1)(内)(1)(外)	赤褐色	赤褐色	2x215x4	1/11
85	縄文 浅鉢	—	3.0	—	擦過・カネトリ	丁寧なナデ	凹底	赤褐色	赤赤褐色	2x215x4	1/11
86	縄文 浅鉢	—	5.0	—	軽い擦過・ナデ	調整済(ナデ)(ミガキ)	凹底・外面に土目の包絡が残る	赤褐色	赤褐色	2x215x4	1/11
87	縄文 浅鉢	—	0.0	—	軽肌(ナデ)(調整済)	ナデ	平底・調整済(丁寧)	赤褐色	赤赤褐色	1x215x4	1/11



第186回 ガンド派遣跡出土土器⑧



第187回 ガンド汎遺跡出土土器④

第2節 遺構の変遷

林・坊城遺跡で検出した遺構は数もそれほど多くはなく、また、削平を受けているため遺存状況もよくないものが多い。後世の削平によって消滅してしまい検出できなかった遺構も存在したと思われるが、林・坊城遺跡で検出した遺構を出土した遺物から時期別に分け、それぞれの時代の遺構の様相について概観してみる。(第178・179図)

林・坊城遺跡で検出した遺構は縄文時代晩期から中世までの時期のものである。これらの遺構を時期別に分けると縄文時代晩期から弥生時代前期(Ⅰ期)、弥生時代後期から古墳時代初頭(Ⅱ期)、古代(Ⅲ期)、中世(Ⅳ期)の4つの時期に大別することができる。それぞれの時期はさらに細分することもできるが、遺構が認められない空白の時期を基準として4つに大別した。

なお、遺物の出土しなかった遺構、出土したが時期が決定できるような遺物がない遺構については省略し、確実に時期の判明した遺構だけを基本的に使用した。

Ⅰ期

Ⅰ期は縄文時代晩期から弥生時代前期である。

D3・E1地区で検出した自然河川(SR01)のD3地区の部分(SR01流路A)で、多量の縄文時代晩期の凸帯文土器とともに木製農耕具を検出している。凸帯文土器は比較的遺存状態も良く、土層の堆積状況をみても流路Aが滞水状況を呈していたことから、遺構は検出していないが流路Aの西側、つまりSR01の西岸の第2微高地(自然堤防)上が生活域であったことがうかがえる。また、自然科学分析の結果から当時の植生はアカガシ亜属・コナラ属を主体とした暖温帯性の森林であったことが判明しており、木製農耕具は周辺に存在するアカガシ亜属を使用したことがわかる。弥生時代前期の遺構は自然河川(E1地区のSR01流路B)・溝状遺構3条(B地区のSD01・E1地区のSD12・G1地区のSD14)・柵列1基(E1地区のSA01)を検出している。生活域が第2微高地から第1微高地・第3微高地にも拡大したことがわかるが、住居跡などは検出していない。弥生時代前期の土器は段を持つものから貼付凸帯を持つものまでがみられ、弥生時代前期はほぼ全般にわたっている。自然科学分析によってこの時期の上層から栽培植物のイネ属が検出されており、本遺跡周辺においてイネの栽培が行なわれていたことはほぼ確実である。水田畦畔などは検出していないが、SR01内で稲作が行なわれていた可能性は残る。

Ⅱ期

Ⅱ期は弥生時代後期から古墳時代初頭である。

検出した遺構は溝状遺構3条(C地区SD02・SD03・D1地区SD04)・「円形周溝墓」状遺構1基(D2地区SX03)である。SD02・03は第1微高地と第2微高地の間に存在する低湿

地（後背湿地）がある程度埋没し、地盤が安定した後で掘られている。SD04は第2微高地上に掘られている。SX03も第2微高地上で検出しているが、東側の溝がSR01にかかるためほとんど消滅している。出土した遺物は弥生時代後期から古墳時代初頃にかけてのものであるが、SX03の築造された時期は弥生時代後期後半である。当該期の墳墓は単独で存在することは稀であり、むしろまとまって築かれるのが一般的であることから、当遺跡の南側に墓域が広がっている可能性がある。弥生時代以降、植生は前段階から急激に変化しマツ属を主体とする植生へ変化したと思われる。人的活動の活発化によって周辺の森林が伐採され、二次林としてマツ林が広がったらしい⁴⁾。

Ⅲ期

Ⅲ期は古代である。

掘立柱建物跡1棟（F1地区のSB01）・溝状遺構5条（D2地区のSD07～10・G1地区のSD15・G2地区のSD17）を検出している。D2地区の溝状遺構3条は第2微高地上に、F1地区のSB01とG1・2地区の3条は第3微高地上に位置している。SB01は主軸方向が真北より約81°東偏しており、梁行方向は約9°西偏している。この掘立柱建物跡の梁行方向とはほぼ同じ方向を持つ溝状遺構にSD18～21の4条がある。SD18～21からは遺物が出土しなかったため時期を特定することはできなかったが、同じ方向を示すことから掘立柱建物跡SB01と同時期のものと考えられる。これらの遺構の示す方向は、現在、当遺跡周辺にみられる方形土地区画の方向とは一致せず、それよりもやや西偏している。

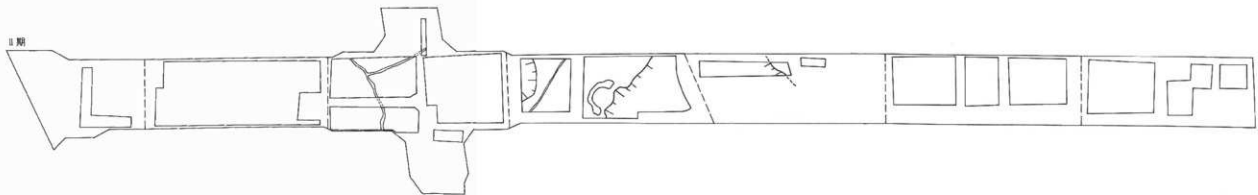
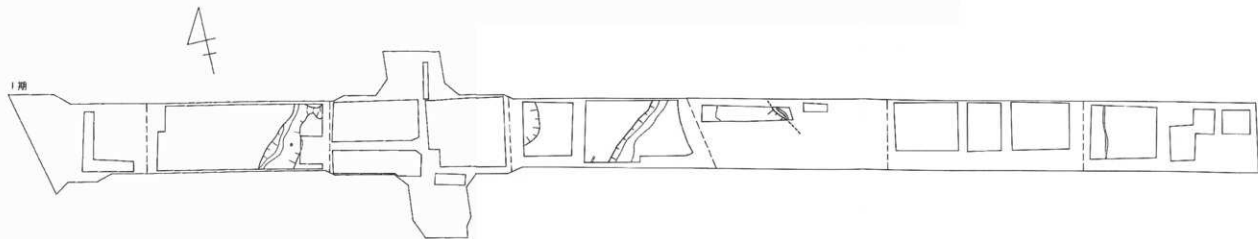
Ⅳ期

Ⅳ期は中世である。

掘立柱建物跡1棟（F3地区のSB03）・柵列1基（F3地区のSA02）・溝状遺構3条（D1地区のSD06・F2地区のSDJ3・G2地区のSD16）を検出している。掘立柱建物跡SB02は主軸方向が真北より約108°東偏している。SA02はこの主軸方向と同じ方向を持ち、SD13は屈曲しながら平行・直交している。いずれも同時期の所産であると考えられる。

註1

同様の森林植生の変化は坂出市川津町に所在する下川津遺跡でも認められているが、マツ林への変化の時期は平安時代頃と考えられている。林・坊城遺跡においては弥生時代以降の時期が考えられ、両者の時期の開きは大きい。このことは高松平野中央部における森林破壊、すなわち土地の開墾が下川津遺跡の所在する丸亀平野東端よりもはるかに先んじていたことを示唆するものであろう。



第188号 遺構平面図(1)



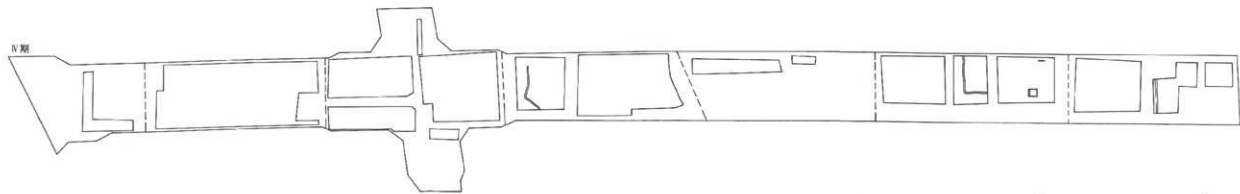
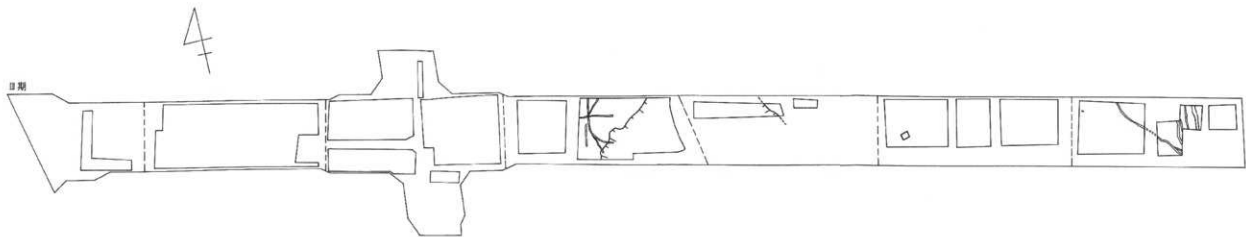


图189② 高橋実遺跡②

第3節 縄文時代晩期の凸帯文土器について

今回の林・坊城遺跡の調査では、自然河川から縄文時代晩期の土器が多量に出土している。香川県内においては、晩期土器のまとまった資料はまだ数が少なく、凸帯文土器研究もほとんど行なわれていないのが現状である。資料の僅少さに起因する晩期の土器編年研究の停滞が将来的に打破されることを願いながら、基礎資料の提示を目的としてここでは、量的にもまとまりのみられる晩期の土器を取り上げてその様相を明らかにしていく。

今回の調査で出土した晩期の土器は、D3・E1調査区にわたって検出した自然河川の流路の一つ（SR01流路A）から出土している。堆積している土層は下から順に最下層・下層・中層・上層の4つに大別できたが、このうちの最下層から中層にわたって、とくに下層の黒色粘土層から集中的に出土している。中層の黄白色～黄褐色細砂層からは弥生前期土器とともに晩期の土器が出土しており、この晩期の土器は磨滅・破損が著しいことから下層の土器が水流の勢いによって洗い出されて混入したものと考えられる。また、最下層の黒色泥砂粘質土層と下層の黒色粘土層の間には細砂などの間層は認められず、両者の差も砂の混入度の違い程度のものであることなどから、両土層間に断絶は認められず連続して堆積していったことがわかる。遺物取り上げ時には分離して取り上げたが、以上のような状況をふまえてSR01流路Aの最下層から中層において出土した晩期の土器群を一括資料として取り扱う。この晩期の土器群はいわゆる凸帯文土器を中心とした一群で、出土量はコンテナ（28ℓ）約15箱分程度である。

1. 各器種の分類と検討

本遺跡から出土した凸帯文土器の器種には深鉢・浅鉢・壺の3種類が認められる。ここでは器種ごとに検討し、その様相を明らかにしていく。

(1) 深鉢

深鉢の分析方法としては、凸帯の位置・凸帯の形状・刻目の形状などの相関関係を基準とした分類が中心である¹⁾。ここでもその方法を基本としながら分析を行なう。分析の対象とした土器の総点数は221点である²⁾。

〈分類〉（第118表）

まず肩部に屈曲を持つ器形を呈する屈曲型深鉢（A類）と、屈曲を持たず砲弾型を呈する砲弾型深鉢（B類）に分け、さらにそれに貼り付けられる凸帯の有無・条数によって分類した³⁾。

A 0 類……屈曲型で凸帯を持たないもの

A 1 類……屈曲型で口縁部に1条の凸帯を持つもの（1条凸帯）

A 2 類……屈曲型で口縁部と肩部の2箇所に凸帯を持つもの（2条凸帯）

B 0 類……砲弾型で凸帯を持たないもの

B 1 類……砲弾型で口縁部に1条の凸帯を持つもの（1条凸帯）

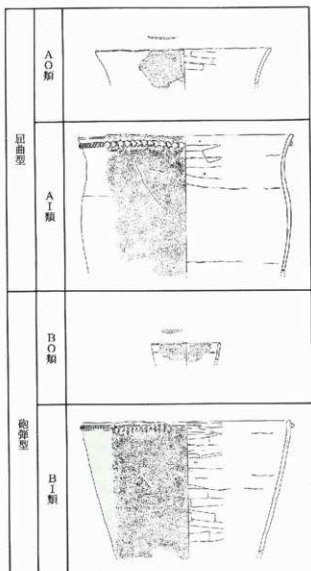
B 2 類……砲弾型で口縁部と肩部の2箇所に凸帯を持つもの（2条凸帯）

このうち林・坊城遺跡では A 0・A 1・B 0・B 1 類の 4 種類を確認している。A 2・B 2 類の 2 条凸帯深鉢については確実な例はみられない⁶⁾。A 類・B 類の深鉢全体に対する割合はそれぞれ 70.3%・29.7% で、屈曲型 7 割・砲弾型 3 割の比率である。さらに 4 種類それぞれの深鉢

全体に対する割合は A 0 類 (9.6%)・A 1 類 (60.7%)・B 0 類 (0.5%)・B 1 類 (29.2%) で、ほとんどが屈曲型の 1 条凸帯である A 1 類に属し、砲弾型 1 条凸帯の B 1 類が次いで 3 割程度を占め、凸帯を持たない屈曲型の A 0 類、砲弾型の B 0 類と続く。凸帯を持たない深鉢は 1 割程度と、いわゆる凸帯文土器がほとんどを占めている。

底部はその形態から平底・凹底・丸底の 3 種類に分類している。底部は出土した点数が 33 点と少なく、その内訳は平底 16 点・凹底 15 点・丸底 2 点である。浅鉢・壺も含めた底部全体に対する深鉢の底部の占める割合はちょうど半分の 5 割となっている。

肩部は、屈曲型の肩部が 52 点出土している。肩部は文様の有無・施工法によって 4 種類に分類



第118表 深鉢分類表

できる。肩部に沈線をめぐらせる a 型と、肩部に爪形文を含んだ刺突を施す b 型、凸帯を貼り付ける c 型、そして何も施さず稜をなす d 型の 4 種類である。それぞれの占める割合は a 型 42.3%・b 型 13.6%・c 型 5.7%・d 型 38.4% と、a 型と d 型がそれぞれ 4 割を占める。なお、d 型は稜を境として上下で調整の異なるものが多い。

〈文様〉

文様には刻目凸帯文の他に、頸部外面に施されたヘラ描文と、爪形文を含む刺突文、口縁端部の刻目、口縁部内面の沈線がある。刻目凸帯を除いたこれらの文様は、器形によって偏って施される傾向が認められる。頸部外面に施されたヘラ描文と刺突文は屈曲型のみ認められ、ヘラ描文は A 1 類に 22 点、A 0 類に 1 点と A 1 類が圧倒的優位にある。逆に刺突文は A 0 類に 3 点が認められるのみで、A 1 類には認められない。口縁端部の刻目は B 0 類が資料が少ないため不安が残るものの、全体に認められ、A 0 類が 17 点、A 1 類が 25 点、B 0 類が 1 点、B 1 類が 8 点と A 1 類がやや優位である。口縁端部に刻目を持つものは合計 51 点で全体の 23.3% である。口縁部内面の沈線は A 1 類で 3 点、B 1 類で 3 点が認められ、1 条凸帯深鉢にのみみられる。確認した沈線はすべて 1 条であった。刻目凸帯文を施すものは A 1 類が 133 点、B 1 類が 64 点の合計 197 点を数え、全体の 90.0% を占める。

〈口縁端部と凸帯の検討〉

出土土器群のなかに 2 条突帯深鉢の存在は想定できるが確認はできないため、ここでは 1 条凸帯深鉢の口縁部を対象に口縁端部の形態・口縁部凸帯の位置・口縁部凸帯の形状・刻目の施文法について取り上げ、分析を加える。使用した土器の点数は 197 点である。

口縁端部の形状はその断面の形態から、面を持つ方形 (Ⅰ型)、丸味をもつ丸形 (Ⅱ型)、先端が細く尖る尖り形 (Ⅲ型) の 3 タイプに分類した。口縁部凸帯の位置は端部から凸帯上方までの垂直距離を測り、端部から下がった位置に凸帯を貼り付ける 1 型 (垂直距離 0.5cm 以上)、端部から少し下がった位置に凸帯を貼り付ける 2 型 (0.4~0.2cm)、端部に接して凸帯を貼り付ける 3 型 (0.1cm 以下) の 3 タイプに分類した。口縁部凸帯の形状は凸帯の断面形態から断面が三角形 (a 型)、下向きの三角形 (b 型)、上向きの三角形 (c 型)、蒲鉾形 (d 型)、台形 (e 型) の 5 タイプを設定した。これらの組合せによって 45 種類のタイプが設定できるが、本土器群で認められたものは 35 種類である。(第 119 表)

口縁端部の形状をみると Ⅰ型は 45 点 (22.8%)、Ⅱ型は 87 点 (44.2%)、Ⅲ型は 65 点 (33.0%) と断面形が丸形の Ⅱ型が 5 割近くを占める。口縁部凸帯の位置をみると 1 型は 132 点 (67.0%)、2 型は 41 点 (20.8%)、3 型は 24 点 (12.2%) と口縁部から下がって付く 1 型が約 7 割を占める。口縁部凸帯の形状を見ると a 型が 98 点 (49.7%)、b 型が 38 点 (19.3%)、c 型が 10 点 (5.1%)、d 型

は16点(8.1%)、e型は35点(17.8%)と断面三角形のa型が約半分を占める。この3つの要素を詳細に検討すると、口縁端部の形態にかかわらず1型・a型との結びつきが強く、口縁端部から下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付けるものが多いことがわかる⁵⁾。

次に、この3つの要素と凸帯の刻目との関係を見てみる。従来、凸帯の刻目はD字・V字など平面の形態に重点がおかれてきたが、ここでは平面形態を生み出した施工法によって分類した。刻目の施工法は工具で突き刺すように刻む刺突刻み、工具を押しつけるように刻む押し刻み、軽く刻む軽い刻み、刻目を持たない無刻みの4種類に分類した。この刻目の施工法は基本的に刻目の形状と対応し、刺突刻みはV字、押し刻みはD・O字、軽い刻みは小V・小D・小O字を施工する。それぞれの全体に占める割合は刺突刻み46点(23.4%)、押し刻み71点(36.0%)、軽い刻み78点(39.6%)、無刻み2点(1.0%)で、軽い刻みと押し刻みがそれぞれ約4割を占めている。口縁端部の形状と刻目の施工法をみると方形(Ⅰ型)は押し刻み、丸形(Ⅱ型)は無刻みを除くほぼ全体と、尖り型(Ⅲ型)は軽い刻みと対応している。凸帯の位置とでは、下がった位置の1型は押し刻み・軽い刻み、やや下がった位置の2型は無刻みを除くほぼ全体と、端部に付く3型は軽い刻みと対応している。凸帯の形状とでは三角形のa型が押し刻み・軽い刻み、上三角のb型が押し刻み・軽い刻み、下三角のc型が軽い刻み、蒲鉾形のd型が押し刻み・軽い刻み、台形のe型が刺突刻み・押し刻みとそれぞれ対応している。

第119表 口縁部・凸帯と刻目の相関

刻目	凸帯	形状	刺突	押し	軽	なし	小計					
Ⅰ	1	a	6	3.0%	10	5.1%	2	1.0%	18	9.1%		
Ⅰ	1	b	1	0.5%	2	1.0%			3	1.5%		
Ⅰ	1	c			1	0.5%	2	1.0%	3	1.5%		
Ⅰ	1	d	2	1.0%	3	1.5%			5	2.5%		
Ⅰ	1	e	1	0.5%	4	2.0%	1	0.5%	6	3.0%		
Ⅰ	2	a	1	0.5%					1	0.5%		
Ⅰ	2	b			1	0.5%			1	0.5%		
Ⅰ	2	c				1	0.5%		1	0.5%		
Ⅰ	2	d										
Ⅰ	2	e			1	0.5%			1	0.5%		
Ⅰ	3	a			1	0.5%	2	1.0%	3	1.5%		
Ⅰ	3	b				2	1.0%		2	1.0%		
Ⅰ	3	c										
Ⅰ	3	d				1	0.5%		1	0.5%		
Ⅰ	3	e										
Ⅱ	1	a	6	3.0%	9	4.6%	9	4.6%	2	1.0%	26	13.2%
Ⅱ	1	b	1	0.5%	4	2.0%	3	1.5%			8	4.1%
Ⅱ	1	c			1	0.5%	3	1.5%			4	2.0%
Ⅱ	1	d	1	0.5%	2	1.0%	2	1.0%			5	2.5%
Ⅱ	1	e	7	3.6%	5	2.5%	3	1.5%			15	7.6%
Ⅱ	2	a	5	2.5%	2	1.0%	2	1.0%			9	4.5%
Ⅱ	2	b	3	1.5%							3	1.5%
Ⅱ	2	c										
Ⅱ	2	d				2	1.0%				2	1.0%
Ⅱ	2	e	4	2.0%		1	0.5%				5	2.5%
Ⅱ	3	a	2	1.0%	1	0.5%	2	1.0%			5	2.5%
Ⅱ	3	b			1	0.5%	3	1.5%			4	2.0%
Ⅱ	3	c										
Ⅱ	3	d										
Ⅱ	3	e			1	0.5%					1	0.5%
Ⅲ	1	a	3	1.5%	6	3.0%	14	7.1%			23	11.7%
Ⅲ	1	b	1	0.5%	4	2.0%	4	2.0%			9	4.5%
Ⅲ	1	c	1	0.5%			1	0.5%			2	1.0%
Ⅲ	1	d			1	0.5%	1	0.5%			2	1.0%
Ⅲ	1	e			1	0.5%	2	1.0%			3	1.5%
Ⅲ	2	a	1	0.5%	1	0.5%	6	3.1%			10	5.1%
Ⅲ	2	b			4	2.0%					4	2.0%
Ⅲ	2	c										
Ⅲ	2	d										
Ⅲ	2	e			2	1.0%	2	1.0%			4	2.0%
Ⅲ	3	a			2	1.0%	1	0.5%			3	1.5%
Ⅲ	3	b			1	0.5%	3	1.5%			4	2.0%
Ⅲ	3	c										
Ⅲ	3	d				1	0.5%				1	0.5%
Ⅲ	3	e										
計			46	23.4%	71	36.0%	78	39.6%	2	1.0%	197	100%

細かな点のみてきたが、口縁端部の形状は断面が丸形が多く、口縁部凸帯の位置は端部から下がった位置に付くものも多く、口縁部凸帯の形状は断面が三角形のものが多いことがわかる。これらから、やや古い要素をもつ傾向をうかがうことができよう。また、刻目の施文法では押し刻みと軽い刻みが多く、施文法だけでは古い要素を持つ傾向は見られない。

本遺跡出土の深鉢についていろいろとみてきたが、屈曲型の器形を呈し、口縁端部から下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付けるものがこの上器群の深鉢の中心となるタイプであるといえる。

(2) 浅鉢

浅鉢は器形を中心に分類した。分析の対象とした浅鉢は、深鉢の分析と同様に口縁部破片のみを使用し、底部および屈曲部（肩部）の破片は含めていない。総点数は151点である。

〈分類〉（第120・121表）

浅鉢の分類については、口頸部の立ち上がり口頸部の長さ、さらに口縁部の形態を基本として分類している。口頸部の立ち上がりから4種類（Ⅰ～Ⅳ類）に、口頸部の長さから2種類（A・B類）に、口縁部が波状口縁か水平口縁かで2種類（a・b類）に分類した。ただし、Ⅳ類だけは屈曲部を持たないため、口縁部内面の沈線の有無・沈線の条数で分類している。これらの組合せから13タイプを設定した。

ⅠAb類（29・30・262～270・620）

屈曲する肩部から直線的に大きく外へ開く器形を呈し、口縁部内面が肥厚する浅鉢である。内外面ともに丁寧なミガキ調整で仕上げられており、赤色顔料が塗布されていたもの（29・265）も認められる。12点を検出している。波状口縁をなすものは認められなかった。口径の大きな浅鉢である。

ⅡAa類（31・274・281・283～306）

屈曲する肩部から口頸部が外反するもので、口頸部の短い波状口縁の浅鉢である。口縁部内面に沈線を持つか持たないか、さらに沈線を持つものも沈線の条数によってさらに細分することが可能である。27点を検出している。口径の大きな浅鉢である。

ⅡAb類（33・35・36・319～323・333・701）

屈曲する肩部から口頸部が外反するもので、短い口頸部を持つ水平口縁の浅鉢である。口径は20cm前後の比較的中型のものが多い。丁寧な調整で仕上げている。10点を検出している。








ⅡBa類（32・282・307・617）

屈曲する肩部から口頸部が外反するもので、長い口頸部を持つ波状口縁の浅鉢である。調整は内外面ともにミガキ調整であるが、外面の屈曲部以下はケズリ調整である。いずれも口縁内面に

沈線をめぐらせている。4点を検出しているが、このうち307は黒色磨研の波状口縁方形浅鉢である。

ⅡBb類 (324~332・334・618)

屈曲する肩部から口頸部が外反するもので、長い口頸部を持つ水平口縁の浅鉢である。ⅡA類に比べて口径の大きいものが多い。いずれも口縁部内面に沈線を1条めぐらせている。調整は内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。11点を検出している。

		A (短頸)	B (長頸)
Ⅰ類	a (波状)		
	b (水平)		
Ⅱ類	a (波状)		
	b (水平)		
Ⅲ類	a (波状)		
	b (水平)		


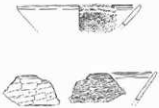

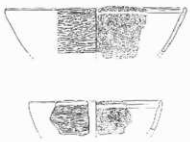


第120表 浅鉢 (Ⅰ~Ⅲ類) 分類表

ⅢAb類 (34・309)

屈曲する肩部から口頸部が内傾して立ち上がるもので、短い口頸部を持つ水平口縁の浅鉢である。内外面とも横方向のミガキ調整で仕上げている。屈曲部の外面には沈線を2～3条施すものが多い。2点を検出している。

ⅢBb類 (308・311・409・410・413・445・447・450・451・619)

屈曲する肩部から口頸部が内傾して立ち上がるもので、口頸部の長い水平口縁の浅鉢である。内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。ⅢA類と同様に屈曲部外面には2～3条の沈

		a (波状)	b (水平)
N類	A (沈線2条)		
	B (沈線1条)		
	C (沈線なし)		

第121表 浅鉢 (N類) 分類表

線を施すものが多い。口径は30cm程度の大型なものから10cm前後の小型のものまでがある。10点を検出しているが450・451・619の3点は波状口縁（ⅢBa類）の可能性もある。この浅鉢ⅢBb類の口径と屈曲半径が縮小し頸部をつくりだし、器高を高くすることによって壺に変容したものが「浅鉢変容壺」である。

ⅣAa類（278）

碗・皿形の器形を呈し、口縁部内面に2条の沈線を持つ波状口縁の浅鉢である。内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。検出したのは1点（278）だけであるが、黒色磨研土器である。

ⅣAb類（351～356）

碗・皿形の器形を呈し、口縁部内面に2条の沈線を持つ水平口縁の浅鉢である。調整は内外面ともにナデ・ミガキ調整が多いが、擦過調整のみのもみられる。6点を検出している。中型の浅鉢である。

ⅣBa類（277・616）

碗・皿形の器形を呈し、口縁部内面に1条の沈線を持つ波状口縁の浅鉢である。磨滅のため調整ははっきりしないが、ミガキ調整と思われる。2点を検出している。

ⅣBb類（39～43・357～386）

碗・皿形の器形を呈し、口縁部内面に1条の沈線を持つ水平口縁の浅鉢である。調整は内外面ともにミガキ・ナデ調整である。比較的丁寧な作りで、黒色磨研のものもみられる。360は内面に赤色顔料が遺存しており、赤彩を施していたことがわかる。口径は30cm程度の大型のものから15cm前後の小型のものまでがある。35点を検出している。

ⅣCa類（273・275・276・279・280）

碗・皿形の器形を呈し、口縁部内面に沈線をめぐらせない波状口縁の浅鉢である。調整は内外面ともに横方向のミガキ調整で仕上げている。口径の大きなものが多い。273は外面に炭化物が付着しており、煮沸に使用された可能性が高い。5点を検出している。

ⅣCb類（44～46・387～408・702）

碗・皿形の器形を呈し、口縁部内面に沈線をめぐらせない水平口縁の浅鉢である。調整は内外面ともにミガキ・ナデ調整のものが多いが、擦過調整のものもみられる。比較的口径の小さなものが多い。黒色磨研のものも見受けられる。389は口縁端部の内外面に炭化物が付着しており、煮沸に使用された可能性が高い。口径が20cm前後のもの10cm前後のもののみみられる。26点を検出している。

以上、器形を中心に浅鉢の分類をみてきた。各類型別に浅鉢全体に占める割合をみると、Ⅰ類が12点（7.9%）、Ⅱ類が52点（34.4%）、Ⅲ類が12点（7.9%）、Ⅳ類が75点（49.7%）となり、装飾性に乏しいⅣ類が全体のほぼ5割を占め、Ⅱ類が3割強とこれにつづいている。口縁が

波状口縁であるか水平口縁であるかを別にして、さらに細かく検討すると、Ⅱ類では口頸部の短いⅡA類がⅡ類中の7割を占めているのに対し、対照的にⅢ類では口頸部の長いⅢB類がⅢ類中の8割強を占めている。この対照的な違いはⅡ類とⅢ類の機能の違いから来ているものと思われる。つまりⅡ類は口頸部が上方に開く形態をしており「盛り合わせる」機能を有してものであり、これに対してⅢ類は肩部径よりも口径が小さくすぼまる形態をしており「貯蔵する」機能を有していたと想定される。このようにⅢ類が「貯蔵する」機能を持っていたからこそ、Ⅲ類の中から「浅鉢変容壺」が生まれてくるのであろう。Ⅰ類もⅡ類と同様に大きく外に開く形態をしており「盛り合わせる」機能を有していたと考えられる。一方、Ⅳ類は口縁部内面の沈線の有無および条数に差がみられるが、基本的には同一形態である。口径が復元できた個体数は少ないが、Ⅳ類の口径をみても、①10～15cm、②20cm前後、③25～30cmの3つにまとまりをみせ、機能分化が進んでいたことがうかがえる。このうち②と③はⅠ～Ⅲ類の他の浅鉢にも普遍的にみられる大きさのものであるが、①は貯蔵機能を有するⅢB類の一部を除いて、他の浅鉢にはみられないものである。Ⅳ類はⅠ～Ⅲ類と違って単純な器形を呈しており、装飾性も乏しいことなどから他の浅鉢とは一線を画してとらえることができよう。Ⅳ類の機能であるが、Ⅲ類にみられるように貯蔵に向けた器形ではなく、上方に口を開いていることから基本的にはⅠ・Ⅱ類と同様に「盛り合わせる」機能を有していたと想定できる。しかし、Ⅰ・Ⅱ類とは異なり、装飾性の乏しさや調整が粗めのものが目立つことなどから日用雑器的な使用の存在が考えられるのである。これらを一步進めてⅣ類の機能として食器の機能を想定したい⁹。ただし、Ⅳ類の中で炭化物が付着しており煮沸に使用した可能性のあるものや、内面に赤色顔料が遺存しているものが見受けられることから、基本的には「盛り合わせる」機能・食器の機能であっても、例外的に他の機能として使用されたものも存在したのであろう。

(3) 壺

壺は口縁部で32点、肩部・胴部で11点を確認している。このうち口縁部32点を分析の対象として分類する。(第122表)

Ⅰ類 (414～426)

内傾する長い頸部から短く外方へ「く」の字に屈曲する口縁部を持つものである。頸部外面の調整は縦方向のヘラミガキと横方向のヘラミガキがあり、頸部内面は横方向のヘラミガキとナゲ・丁寧なナゲ風擦過がみられる。大きく張り出す肩部を持つようであり、肩部と頸部の境には段を持つようである。黒色磨研・黒色磨研系のものが多く、418は外面全体と口縁部内面に、421は口縁部付近に赤色顔料を塗布している。13点を検出している。

Ⅱ類 (437～442)

口縁部が短くほぼ垂直に立ち上がり、頸部が大きく開くものである。このタイプの壺の肩部は

I類と異なりあまり強く肩が張らないようである。調整は外面がナデ・横方向のヘラミガキ、内面がナデ・丁寧なナデ風擦過である。黒色磨研・黒色磨研系のもはみられない。6点が出土している。

III類 (47・313・443・444・446・448・449・453)

いわゆる「浅鉢変容壺」である。外反しながら内傾する長い頸部から口縁部が短く屈曲するものである。口縁部内面に沈線をめぐらせるものが多い。調整は内外面とも横方向のヘラミガキ調整が多い。黒色磨研ものもみられる。8点を検出している。

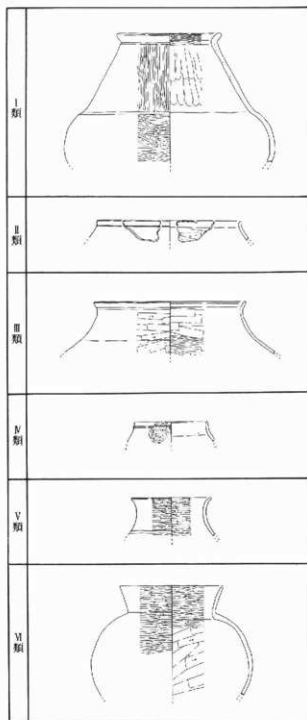
IV類 (452)

いわゆる「深鉢変容壺」である。屈曲型の深鉢の口径と胴部最大径が縮小し、頸部をつくりだすことによって壺へと変容したものである。452は肩部から緩やかにすぼまる口縁を持っており、口縁端部からやや下がった位置に凸帯を貼り付けている。確認できたのは1点だけである。

V類 (453~456)

頸部から大きく外反して外方に開く口縁部を持つものである。内外面ともに横方向のヘラミガキ調整をしているようである。453は口縁下に沈線を数条施している。454は肩部に1条の沈線を施している。456は口縁部下に段を持っているようである。4点を検出している。

VI類 (459)



第122表 壺分類表

球形の胴部に、外傾しながら直線的に外方へ開く口頸部を持つもので、1点だけを確認している。調整は外面と口頸部の内面が横方向のヘラミガキ調整で、胴部内面はミガキ風擦過調整で仕上げている。黒色磨研土器である。

以上、壺についてみてきた。各類型の壺全体に対する割合は、Ⅰ類が40.6%、Ⅱ類が18.8%、Ⅲ類が21.9%、Ⅳ類が3.1%、Ⅴ類が12.5%、Ⅵ類が3.1%となる。壺全体に対してⅢ類が2割と「浅鉢変容壺」が一定量存在している点は当地域における壺の受容形態、ひいては水稲農耕の受容形態を考える際に注目される。また、わずか1点の出土ではあるがⅥ類の壺は類例も見当らず、系譜・出自については不明である。

(4) 底部

底部は66点が確認できた。しかし、いずれも底部だけの破片としての出土であるため、深鉢の底部とそれ以外（浅鉢・壺）の底部との判別はできたが、浅鉢と壺はどちらも精製土器であることから底部を見ただけでは判別できなかった。そのためここでは粗製土器（深鉢）と精製土器（浅鉢・壺）とで2つに大別し、さらに底部の形態によって丸底、凹底、平底の3タイプに細分した。なお尖底は確認していないためここからは除いた。

粗製土器と精製土器の割合は5割ずつと、半分であった。粗製土器では丸底2点（3.0%）、凹底15点（22.8%）、平底16点（24.2%）で、凹底と平底がほぼ同数存在している。精製土器では丸底はなく、凹底2点（3.0%）、平底31点（47.0%）と平底が圧倒的に多い。

2. 器種組成（第123表）

本土器群で認められる器種は深鉢、浅鉢、壺の3器種である。出土点数は深鉢221点、浅鉢151点、壺32点である。それぞれの全体に占める割合は深鉢が54.5%、浅鉢が37.6%、壺が7.9%となり、深鉢がほぼ5割強を占めている。それぞれの機能を考えてみると深鉢が煮沸、壺が貯蔵という機能をそれぞれ持っていることについては異論はない。浅鉢は器形から4タイプに大別することができ、Ⅰ・Ⅱ類は「盛り合わせる」機能を、Ⅲ類は「貯蔵する」機能を、Ⅳ類は基本的にはⅠ・Ⅱ類同様の「盛り合わせる」機能を持っているが食器の機能を想定したことは前述したとおり

第123表 器種組成一覧表

器種	類型	小区分別	大区分別		器種別			
深鉢	A0	21点	154点	38.5%	219点 54.5%			
	A1	133点						
	B0	1点	65点	16.2%				
B1	64点							
浅鉢	Ⅰ	ⅠAa	12点	12点	3.0%	151点 37.6%		
		ⅠAb	27点	37点	5.2%			
	Ⅱ	ⅡAa	19点				15点	12.0%
	ⅡB	4点	2点					
	Ⅲ	ⅢA		11点	12点		3.0%	
	ⅢB	2点						
	鉢	Ⅳ	ⅣA	19点	19点		7.5%	
			ⅣB	2点	7点			
		Ⅴ	ⅤA	1点			37点	18.7%
			ⅤB	8点				
Ⅵ		ⅥA	2点	31点	47.0%			
		ⅥB	35点					
壺	Ⅶ	ⅦA	5点	18点	3.2%			
		ⅦB	26点			32点	7.9%	
		ⅦC	5点					
		ⅦD	6点					1.5%
		ⅦE	7点					
		ⅦF	1点					1.7%
ⅦG	1点	0.2%						
ⅦH	4点		1.0%					
ⅦI	1点	0.2%						

である。そこで機能的な点を考慮してまとめなおすと、煮沸の機能（深鉢）54.5%、「盛り合わせる」機能（浅鉢Ⅰ・Ⅱ類）15.9%、食器の機能（浅鉢Ⅲ類）18.7%、貯蔵の機能（壺・浅鉢Ⅲ類）10.9%となって、煮沸が5割強、「盛り合わせる」が2割弱、食器が2割、貯蔵が1割という結果（概ね5：2：2：1）になる。この比率は佐賀県唐津市菜畑遺跡の夜臼單純期および夜臼期の比率（6：1：2：1）と近似する比率となる⁸。備前瀬戸を挟んで林・坊城遺跡と向かいあう岡山県岡山市の津島岡大遺跡では同じ5：2：2：1の比率を示している⁹。

3. 編年の位置付け

瀬戸内地方での縄文晩期後葉から末葉の凸帯文土器の編年は、比較的資料のまとまっている岡山県を中心とした編年がなされており、前池式・沢田式という編年型式が設定されている。香川県内においては資料数が少なく編年型式の設定も行われていないため、この2つの型式と比較検討を行い、本土器群の編年の位置付けについてみてみたい。この両型式の特徴・関係についてはすでに分析が行われており、それらを参考にしながら比較を行なう¹⁰。

前池式の遺跡としては南方前池遺跡¹¹と広江・浜遺跡¹²がある。前池遺跡では深鉢と浅鉢が認められ、深鉢は全体の約8割で浅鉢は約2割を占めるという。深鉢は屈曲型を基本とし、口縁端部は平坦に仕上げられているものが主体をなし、口縁端部の刻目は約8割に認められる。調整は二枚貝条痕調整が多く、頸部にC字形爪形文やヘラ描文が認められる。広江・浜遺跡では深鉢と浅鉢が認められる。深鉢は屈曲型を基本とし、口縁端部は面取りしているものが多く約9割に刻目を施している。凸帯は口縁端部から下がった位置に貼り付けられるものが多い。調整は二枚貝条痕をとどめるものが多く、頸部に文様を施すものは少ないという。このように前池式の深鉢は口縁端部に面取りを行ない刻目を施し、凸帯が端部から下がった位置に貼り付けられる屈曲型で、条痕調整を行なうものが主体をなしていることがわかる。沢田式の遺跡としては百間川沢田遺跡¹³・津島岡大遺跡¹⁴がある。沢田遺跡では深鉢が約6割、浅鉢が約4割、それに壺がわずかに伴う。深鉢は1条凸帯と2条凸帯がみられるが、屈曲型を基本とし、口縁端部は尖り丸味で端部に刻目を施すものはわずかである。調整はナデ・ケズリが基本で、二枚貝条痕は認められない。津島岡大遺跡では深鉢が約4割、浅鉢が約5割、それに壺がわずかに伴う。沢田遺跡の様相とはほとんど変わらないが、沢田遺跡よりもやや古い要素が多くみられるようである。林・坊城遺跡は深鉢が約5割、浅鉢が約4割、壺が約1割という器種構成をしている。深鉢をみると、屈曲型が大半を占め、口縁端部は丸味を持ち刻目はわずかである。口縁端部から下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付けているものが多く、調整はナデ・ケズリが基本となっている。主体となる深鉢は前池式では「Ⅰ」タイプ、沢田式では「P」タイプ¹⁵であることが指摘されている¹⁶。この2つのタイプを本土器群から抽出してみると「Ⅰ」タイプは20点、「P」タイプは89点で、それぞれの深鉢全体に占める割合は「Ⅰ」タイプが10.2%、「P」タイプが45.2%となり、「P」タイプの深

鉢が主体となる。このように器種構成、主体となる深鉢などを比較してみると、本土器群は前池式とは区別され沢田式に近い様相を示していると思われる。

そこで、沢田式と本土器群を比較検討してみることにする。先述したとおり沢田式に属する遺跡には百間川沢田遺跡と津島岡大遺跡の2遺跡がある。これら両遺跡との比較を容易にするために口縁部の分類は津島岡大遺跡の分類基準に合わせている¹⁸。また、現在の凸帯文土器の編年においては新しくなるにつれて、深鉢は凸帯の位置が下方から口縁端部に向かって上昇し、1条凸帯のみから2条凸帯が増加し、口縁端部の刻目の減少するという動きが指摘されている¹⁹。これらの変化の要素を考慮しながら①口縁部の形状と凸帯の位置の関係、②凸帯上の刻目の変化、③口縁端部の刻目の出現率という深鉢の3項目について比較検討してみる。

① 口縁端部の形状と凸帯の位置

I～N類の各タイプが全体に占める比率を求めてみると、沢田遺跡ではI類：II類：III類：N類が13.4%：65.4%：21.2%、津島岡大遺跡では40.6%：49.6%：9.8%、林・坊城遺跡では19.8%：68.0%：12.2%となり、II・III類が最も多い点は3遺跡に共通しているが、I・N類に違いがみられる。詳細にみると、古い要素が強いと考えられるI類は津島岡大遺跡が4割と多く、林・坊城遺跡と沢田遺跡では約2割程度と少ない。逆に新しい要素が強いN類では沢田遺跡が2割で最も多く、林・坊城遺跡と津島岡大遺跡が約1割と少ない。II・III類については林・坊城遺跡と沢田遺跡が約7割と多いのに対して津島岡大遺跡では5割である。古い要素は減少し、新しい要素が増加する傾向から考えれば、津島岡大遺跡→林・坊城遺跡→沢田遺跡の時間的關係がうかがえよう。

② 凸帯上の刻目

凸帯上の刻目については近畿地方の凸帯文土器の分析では、刻目を刻むたびに工具を凸帯から離して刻んでいたのが、工具を離さずに刻むようになり、さらにはそれが軽く刻まれるようになるという簡略化の傾向が指摘されている²⁰。つまりV字（施文法は刺突刻み）からD・O字（押し刻み）へ、さらに小V・小D字（軽い刻み）へと変化している。林・坊城遺跡においては刺突刻みが約2割、押し刻みと軽い刻みがそれぞれ約4割ずつとなっており、古い要素と考えられる刺突刻みが少ない点が指摘できる。津島岡大遺跡では圧倒的にD字刻みが多く他のタイプは不明瞭であるために、刻目の浅い深いで分類している。報告書によれば浅いタイプは3割、深いタイプは7割を占めており、押し刻みのD字が多いようである。沢田遺跡では刺突刻みが約3割、押し刻みが約6割、軽い刻みが1割となっている。瀬戸内地方の刻目は他地域と比較して軽いことが指摘されており²¹、押し刻みと軽い刻みとをまとめて考えると沢田遺跡と林・坊城遺跡では刺突刻み：押し刻み・軽い刻みが約3割：約7割と近似した比率を示す。津島岡大遺跡も報告書によればほぼ似たような比率を示すらしい。凸帯上の刻目からは3遺跡とも似たような様相を示している

といえよう。

③ 口縁端部の刻目の出現率

口縁端部に刻目を持つものの比率は沢田遺跡で約10%、津島岡大遺跡で約18%、林・坊城遺跡で約23%を占めている。あまり明確な差とは言えないが林・坊城遺跡→津島岡大遺跡→沢田遺跡の順で少なくなる。

次に浅鉢について比較検討してみる。沢田遺跡で主体を占める浅鉢は逆「く」字形に屈曲する胴部に短く外反する口縁部が付くもので本土器群ではⅢ類に相当する。浅鉢の中で約5割を占めている。ついで多いのが碗形を呈するもので本土器群のⅣ類に相当する。津島岡大遺跡では頸部を持たず胴部からやや内彎あるいは直線的に立ち上がるものが主体を占めており、本土器群ではⅣ類に相当する。浅鉢の中で約4割を占めている。林・坊城遺跡ではⅣ類が約5割を占め、Ⅲ類が約3割とこれにつづいている。Ⅳ類についてみてみると津島岡大遺跡と林・坊城遺跡ではかなりの割合を占めているのに対して沢田遺跡では非常に少ない。この比率の高さを津島岡大遺跡ではやや特異な状況と判断しているが²⁰、林・坊城遺跡でも同様に特異な状況を示しているのかもしれない。Ⅲ類については「貯蔵する」機能を持っており「浅鉢変容壺」を生み出す母胎となるものであることについては先述した。つまり壺の影響を受けた新しいタイプの一群であるといえる。このことから、本土器群でいう浅鉢Ⅲ類については、津島岡大遺跡の約1割から林・坊城遺跡の約3割、さらに沢田遺跡の約5割と増加する傾向で捉えることができよう。

以上、述べてきた諸々の状況から判断すると、林・坊城遺跡出土の凸帯文土器群は広義の沢田式²¹に含まれると考えられるが、その中でも津島岡大遺跡の上器群と同様に古い段階に位置付けることが妥当であろう。

4. ガンド浜遺跡の凸帯文土器

ここでは香川県において比較的数量的にまとまって出土している坂田市瀬石島のガンド浜遺跡から出土した凸帯文土器を分析する。先述したように、縄文土器は後期のものから晩期のものまでが混在する形で包含されており、かなりの時期幅を持っている。そのため、縄文晩期後葉～末葉の凸帯文土器の深鉢に伴う浅鉢の判断が困難であることを考慮して、深鉢を中心に分析を進めることにする。

(1) 深鉢

林・坊城遺跡出土の深鉢と同様の分類基準を使って分類する。分析の対象とした土器の総点数は321点である。

〈分類〉

A0・A1・A2・B0・B1類の5種類を確認している。わずかに1点ではあるが、A2類の

2条凸帯深鉢（第174図 54）を確認している。A類：B類は209点：112点で、屈曲型が約7割、砲弾型が3割の比率である。A0：A1：A2：B0：B1は27.1%：37.7%：0.3%：14.6%：20.2%となっている。凸帯を持たないものと凸帯を持つものとの比率は41.7%：58.3%で、凸帯を持つ深鉢が6割と多い。

底部は14点を確認している。内訳は凹底9点、丸底4点、平底1点であり、凹底が約6割を占めている。底部全体に占める深鉢の底部の割合は約5割である。

肩部は21点を確認している。a型（沈線）が3点、b型（爪形文・刺突文）が6点、c型（凸帯）が3点、d型（稜）が9点で、d型が約4割を占めており、次いでb型が約3割を占めている。c型の3点のうち2点は砲弾型（B型）の胴部凸帯であるが、それ以外はすべて屈曲型（A型）の肩部である。

〈文様〉

頸部に施される文様にはヘラ描文と、爪形文を含めた刺突文がある。これらの文様は屈曲型のみにみられるものであり、B類には認められない。ヘラ描文はA1類にしかみられず、逆に刺突文はA0類に13点、A1類に1点とA0類に圧倒的優位さがみられる。

口縁端部の刻目は2条凸帯深鉢を除く全体で179点、深鉢全体の55.7%に認められる。それぞれの類型内における割合を求めるとA0類が45点で51.7%、A1類が69点で57.0%、B0類が23点で48.9%、B1類が42点で64.6%となる。すべての類型で5割を占めており、中でもB1類では6割を占めている。口縁部内面の沈線を施すものはA0・A1・B0・B1類で確認できたがいずれもほんのわずかである。強いて言うならばA1類が多い。

〈口縁端部と凸帯の検討〉

ガンド浜遺跡出土土器群の深鉢の中で2条凸帯深鉢は1点しか確認できなかったため、ここでは1条凸帯深鉢のみ（A1・B1類）を対象として、口縁端部の形態・口縁部凸帯の位置・口縁部凸帯の形状・刻目の施文法について分析する。対象とする土器の点数は186点である。

口縁端部の形態をみるとⅠ型は68点（36.6%）、Ⅱ型は107点（57.5%）、Ⅲ型は11点（5.9%）となり、断面形が丸形のⅡ型が6割を占めている。口縁部凸帯の位置をみるとⅠ型は134点（72.0%）、2型は40点（21.5%）、3型は12点（6.5%）となり、口縁端部から下がって付くⅠ型が7割を占めている。口縁部凸帯の形状ではa型が84点（45.2%）、b型が26点（14.0%）、c型が8点（4.3%）、d型が26点（14.0%）、e型が42点（22.6%）となり、断面三角形のa型が全体の約5割を占めている。これらの検討から、口縁端部の形態にかかわらずⅠ型・a型の結びつきが強く、口縁端部から下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付けるものが多いことがうかがえる。

次にこれらの3つの要素と刻目の施文法との関係をみてみる。まず刻目の施文法をみてみると刺突刻みが47点(25.3%)、押引刻みが102点(54.8%)、軽い刻みが26点(14.0%)、無刻みが11点(5.9%)で、押引刻みが5割を占めている。口縁部の形態と施文法をみるとⅠ型は押引刻みと、Ⅱ型は押引刻み・刺突刻みとの相関がうかがえる。凸帯の位置とではⅠ型は押引刻み・刺突刻みと、Ⅱ型は押引刻みとの相関がうかがえる。凸帯の形状とではa型とe型は押引刻みとの相関がうかがえるが、b～d型ははっきりしない。強いて言うならば押引刻みとの相関関係がうかがえよう。

以上の分析から、ガンド浜遺跡出土の凸帯文土器群の深鉢で主体を占める深鉢は、屈曲型で、口縁部から下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付ける1条凸帯深鉢であるといえる。平井の文様類型でいう「P」タイプの1条凸帯深鉢である。また、凸帯を持たない屈曲型の深鉢もかなりの割合を占めている。

(2) 浅鉢

深鉢と同様に林・坊城遺跡の浅鉢と同じ分類基準で分類する。林・坊城遺跡ではみられなかったものについては、新たに設定して追加している。分析に使用した資料の点数は186点である。

(分類)

新たに設定したものについて特徴を述べるが、林・坊城遺跡にみられたものは説明を省略している。ガンド浜遺跡出土の凸帯文土器の浅鉢は12タイプが設定できる。

Ⅰ Aa類

屈曲する肩部から口縁部が外方へ開く器形を呈し、口縁部に凸起を持つものである。口径の大きな浅鉢で、4点を確認している。凸起はリボン状のものが2点、小さめの凸起が2点である。調整は内外面ともに丁寧にミガキ調整で仕上げている。

Ⅱ Ac類

屈曲する肩部から口頸部が外反するもので、口頸部が短く、いわゆる「鏡形口頸部」を持つ浅鉢である。口縁部を面取りし、丁寧に調整で仕上げている。5点を検出している。

次に、各類型別に浅鉢全体に占める割合をみてみると、Ⅰ類が22点(11.8%)、Ⅱ類が75点(40.3%)、Ⅲ類が14点(7.5%)、N類が75点(40.3%)となり、Ⅱ類とN類がそれぞれ4割を占めている。細かくみていくと、Ⅱ類は口頸部の長い水平口縁のⅡBb類がⅡ類の中で5割を占め、ついで口頸部の短い水平口縁のⅡAb類が約3割を占めている。林・坊城遺跡ではみられなかったⅡAc類はわずかである。N類では内面に沈線を持たないNcb類がN類の中で8割と圧倒的に優位である。このNcb類は口縁端部に刻目を持つものと持たないものとで細分することができる。刻目を持つものは林・坊城遺跡では確認していない。Ncb類の中における両者の比率は刻目

を持つものが13点(21.3%)、刻目を持たないものが48点(78.7%)で、刻目を持たないものが圧倒している²⁶。浅鉢の機能については林・坊城遺跡の資料で説明したのと同じである。

(3) 壺・底部

壺であるが、明らかに壺と判断できる資料は確認していない。ただ、深鉢の中で肩部から緩やかにすぼまる口縁を持つものが4点みられ、林・坊城遺跡の壺Ⅱ類としたいいわゆる「深鉢変容壺」にあたる。変容壺の存在から、壺そのもの(林・坊城遺跡のⅠ～Ⅲ類)の存在が想定できるが、いずれにしても量的にはわずかなものであろう。

底部は30点を確認している。粗製土器(深鉢)と精製土器(浅鉢)の比率はほぼ1:1であるが、わずかに精製土器が多い²⁷。粗製土器では凹底が9点(30.0%)、丸底が4点(13.3%)、平底が1点(3.3%)となる。精製土器では凹底が10点(32.3%)、平底が6点(20.0%)で丸底はみられない。底部全体でみても凹底が6割と多い。

(4) まとめ

以上、ガンズ浜遺跡出土の縄文時代晩期の土器群についてその様相を分析検討してきた。深鉢については凸帯を持たない深鉢(平井の「A」タイプ)と1条凸帯深鉢(平井の「I」タイプと「P」タイプ)が主体をなしている。凸帯を持たない深鉢の「A」タイプを主体とする遺跡に、刻目凸帯文土器出現直前の土器型式である谷尻式の標式遺跡である岡山泉谷反遺跡²⁸がある。また、1条凸帯深鉢「I」タイプは前池式の主体をなし、「P」タイプは広義の沢田式の主体をなしていることは先述した。浅鉢ではⅡ・Ⅲ類が主体をなすが、古い要素を多く残したⅠ類もある程度存在している。これらの様相から、ガンズ浜遺跡出土の縄文時代晩期の土器群は縄文時代晩期後葉から末葉にかけてのものであり、瀬戸内地方の土器型式では谷尻式・前池式・沢田式(広義の沢田式)にわたる資料であるといえる²⁹。

5. おわりに

本調査で自然河川から出土した縄文時代晩期末葉の土器群について、器種ごとに分類を行ない編年的な位置付けなどの分析・検討を行なった。土器群の様相は岡山県の津島岡大遺跡の資料とほぼ同じ様相を示しており、編年的には瀬戸内地方における前池式につづく沢田式の古い段階に位置付けることができよう。沢田式を新・古段階の2つに細分し、その古段階を分離させて新たに型式名を付けるかどうかは、現状ではまだ資料が不足しており今後の資料の増加に期待する部分は大きいといえる。

今回は資料の提示に終始してしまった感が強く、今後に残した課題も多い。今後は瀬戸内地方における編年的位置の検討のみならず、九州・近畿地方を含めた西日本における編年的位置の検

討も行なっていきたい。それと同時に、香川県内における編年・弥生時代前期との関わり等について検討を行なっていきたい。

注

- 1 代表的なものとして家根祥多氏の分類があげられる。
『縄文土器から弥生土器へ』『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984
『晩期の土器・近畿地方の土器』『縄文文化の研究4 縄文土器Ⅱ』雄山閣 1981
- 2 口縁部はとくに小破片が多いため、肩部の屈曲がはっきり判断できないものも含まれていることを一言お断わりしておく。この点数は肩部および底部の点数を除いた点数である。
- 3 刻目凸帯文の有無・条数を基準としている分類が多いが、ここではまず器形から分類した。それは、①深鉢の屈曲の有無は異なる煮沸形態を体現したものであり、②刻目凸帯文の有無・条数は地域差・時間差を体現したものであるからである。さらに刻目凸帯文はその名のとおり文様の一つの形態に過ぎず、文様は器種を超えて施されるものであることから、分類の根幹とするには不適切であると判断したからである。
- 4 胴部凸帯の可能性を持つ破片がわずかではあるがみられることから、2条凸帯も存在したと思われるが、破片で出している状況のため1条凸帯のA1・B1類のなかに含まれている可能性もある。
- 5 端部断面が方形で下がった位置に三角形の凸帯を持つもの(I・1・a型)が18点(9.1%)、端部が丸形で下がった位置に三角形の凸帯を持つもの(II・1・a型)が26点(13.2%)、端部が尖り型で下がった位置に三角形の凸帯を持つもの(III・1・a型)が23点(11.7%)で、この3つをあわせると全体の34.0%を占める。
- 6 外へ開く長い頸部を持つ点ではII類とまったく変わらないが、口縁端部内面を肥厚させる点が大きく異なること、さらに直接縄文時代晩期中葉からの浅鉢の系譜につながるものである点からII類とは区別した。
- 7 N類の中で口径が復元できたものは22点と少なく、N類全体75点の約3割にすぎないため、数字が変更する可能性は十分にある。しかし、口径が大小にまとまりをみせるという大まかな傾向は把握できると思われる。
- 8 他の浅鉢に比べて調整が粗雑な感じは受けるが、深鉢のような粗製土器に見られる粗雑さはない。内面の調整にミガキ・ナデが施されているのは、固形食物だけではなく液体のようなものも入れて使用するためであろう。
- 9 菜畑遺跡では山ノ寺式期の4:1:4:1という比率から夜臼単純期・夜臼式期の6:1:2:1に移行すると言われており、林・坊城遺跡の5:2:2:1という比率はその移行途中の段階を示すものといえよう。
中島直幸「初期稲作期の凸帯土器——唐津市菜畑遺跡の土器編年を中心に——」
『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』1982
- 10 津島岡大遺跡では粗製浅鉢(II・C類)が25%を占め、主要な独立した構成器種となっていることが指摘されている。林・坊城遺跡では、この粗製浅鉢(II・C類)に相当するのが浅鉢N類であり、18.7%と約2割を占めている。津島岡大遺跡には及ばないがN類(粗製浅鉢)の占める割合は高いといえる。
- 11 平井 勝「岡山における縄文晩期凸帯土器の様相」『古代古備』第10集 1988
家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984

- 12 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方遺跡」『私たちの考古学』第7号 1956
- 13 岡野忠彦・間華直子はか「広江・沢遺跡」『倉敷考古学研究会報』14 1975
- 14 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書59 百間川沢田遺跡2」 1985
- 15 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「岡山大学校内遺跡発掘調査報告 第5冊
津島岡大遺跡 3—3次調査—(学生部男子学生寮予定地 AW00区)」 1992
- 16 註11の平井論文の文様類型のタイプである。
- 17 屈曲型・水平口縁・凸帯あり・凸帯上の刻目あり・内面の沈線なし・頸部の爪形文なし・頸部のヘラ描文なしという7つの項目は共通しているが、口縁端部の刻目の有無の1項目のみが異なっている。「I」タイプは端部に刻目を持つが、「P」タイプは端部に刻目を持たない。
- 18 本土器群を津島岡大遺跡の分類（I～N類）に当てはめると次のようになる。I類は口縁端部I型、凸帯の位置1・2型、凸帯の形状a～d型、II類は口縁端部II型、凸帯の位置1・2型、凸帯の形状a～d型、III類は口縁端部III型、凸帯の位置3型、凸帯の形状a～d型、IV類は口縁端部I～III型、凸帯の位置3型、凸帯の形状a～d型となる。なお、凸帯の形状のe型は上下から挟んで凸帯を貼り付けており、a型と同じ手法であるのでa型に含めて統計を出した。
- 19 註1。これらの変化は近畿地方における凸帯文土器の分析から導きだされたものであるが、瀬戸内地方においても同様の動きをみせるものと思われる。
- 20 註1。家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984
- 21 註1。家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984
- 22 註15
- 23 岡田博氏が設定した沢田式が新古の2段階に細分できる可能性があることは春成秀爾氏が指摘している。津島岡大遺跡で出土した凸帯文土器群がその古段階に相当すると思われる。平井氏は津島岡大遺跡の土器群を型式差と認めて前池式と沢田式の間に置いているようである。資料の少ない現状では型式差として区別するよりも、沢田式の古段階と理解しておきたい。したがってここでは新古段階を含んだ沢田式を広義の沢田式とし、新段階を狭義の沢田式として扱っている。
- 春成秀爾『弥生時代の始まり』東京大学出版 1990
- 24 深鉢の口縁端部の刻目は時期が下るにしたがって減少することが判明している。N/Cb類における口縁端部の刻目も同様に減少するものと判断される。
- 25 林・坊城遺跡では浅鉢と壺を精製土器としたが、ガンド沢遺跡の場合は壺の存在は想定できるものの量的にはわずかなものと思われることから、精製土器は浅鉢のみとして扱っている。粗製土器は14点、精製土器は16点である。
- 26 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11 谷尻遺跡」1976
- 27 3型式にわたる資料が混在して出上しているため、深鉢と浅鉢のセット関係が確実に押さえることができなかった。そのためそれぞれの型式の細かな器種組成の比率については判断できていない。

版 圖





(1)A地区全景（北から）



(2)A地区全景（南から）

図版 2



(1)A地区全景（西から）



(2)A地区全景（東から）



(1)B地区全景（東から）



(2)B地区全景（西から）

図版 4



(1)S D01全景 (南西から)



(2)S D01全景 (東から)



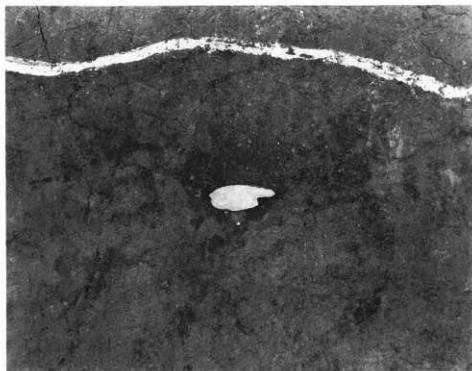
(1) S D01土器出土状況（北から）



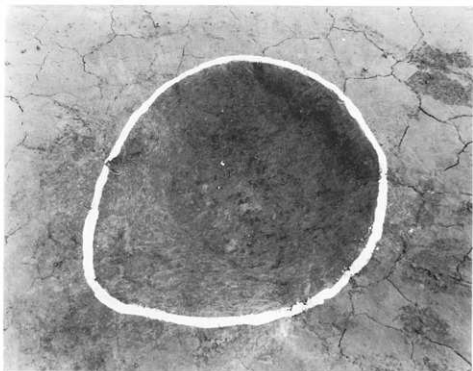
(2) S D01土器出土状況（北から）



(1)S D01土器出土状況（東から）



(2)S D01石釘出土状況（南から）



(1) S K 01 (南から)



(2) C 1 地区全景 (西から)

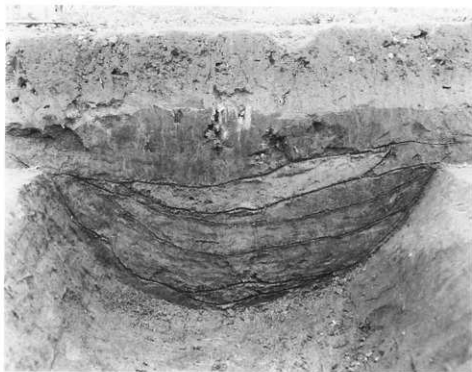
図版 8



(1) S D 02・03 (東から)



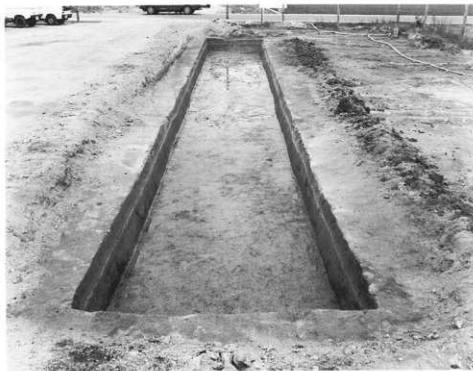
(2) S D 02・03 (北東から)



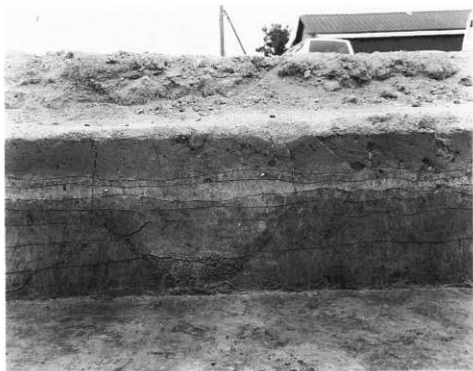
(1) S D02土層断面



(2) C 3地区土層断面 (北東から)



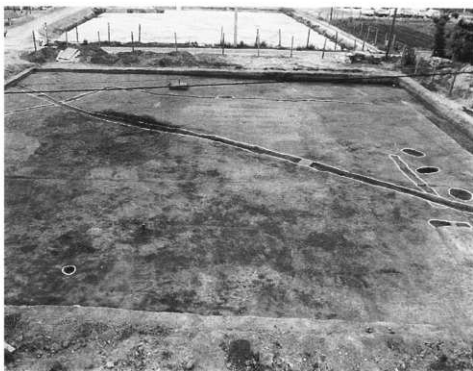
(1)C 4 地区全景 (南から)



(2)S D03土層断面



(1)C 5 地区全景 (西から)



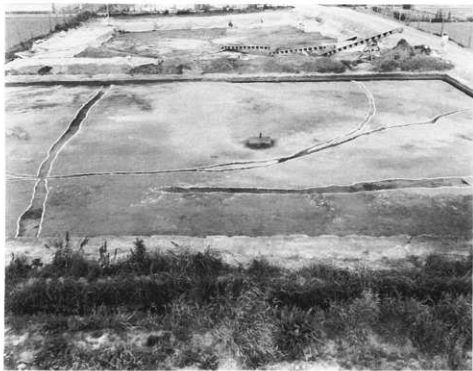
(2)D 1 地区全景 (東から)



(1) S K 02・03・04・08



(2) S D 04土層断面



(1) D 2 地区全景 (西から)



(2) S X 03 遺物出土状況 (西から)



(1) S X 03遺物出土状況（西から）



(2) S X 03遺物出土状況（北から）



(1)S X03遺物出土状況（西から）



(2)S X03遺物出土状況（東から）



(1) S X 03遺物出土状況



(2) S X 03遺物出土状況



(1)S X 03遺物出土状況



(2)S X 03遺物出土状況



(1) S X 03遺物出土状況



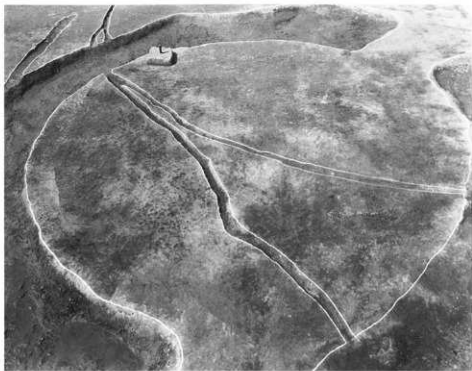
(2) S X 03遺物出土状況



(1) S X 03 全景 (西から)



(2) S X 03 全景 (北から)



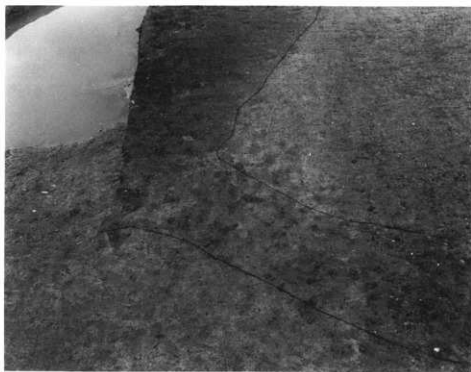
(1) S X 03 全景 (南から)



(2) S X 03 土層断面



(1) S X 03陸橋部



(2) S D 11検出状況 (西から)



(1) S D07・08・09・10



(2) S D08 上層断面



(1) D2・D3地区全景（東から）



(2) SR01流路A（北東から）



(1)SR01流路A土層断面



(2)SR01流路A土層断面



(1)S R01流路A遺物出土状況



(2)S R01流路A遺物出土状況



(1) S R01 流路 A 遺物出土狀況



(2) 諸手掘出土狀況



(1)諸手鎌出土状況



(2)諸手鎌出土状況



(1) 諸手銀田土状況



(2) 諸手銀取り上げ風景



(1) 諸手録取り上げ風景



(2) 諸手録取り上げ風景



(1)えぶり出土状況



(2)えぶり出土状況



(1)小型鋤状木製品出土状況



(2)小型鋤状木製品出土状況



(1)小型鐮状木製品出土状況



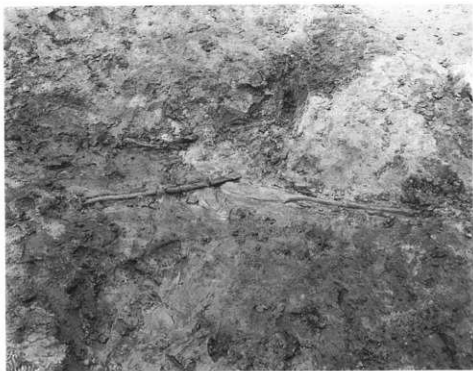
(2)小型鐮状木製品出土状況



(1)小型鋤状木製品出土状況



(2)小型鋤状・柄付半截木製品出土状況



(1)小型鋤状・柄付半截木製品出土状況



(2)柄付半截木製品出土状況



(1)木製品出土状況



(2)縄文土器出土状況



(1) 繩文土器出土狀況



(2) 繩文土器出土狀況



(1) 縄文土器出土状況



(2) 縄文土器出土状況



(1) 繩文土器出土狀況



(2) 古式土師器出土狀況



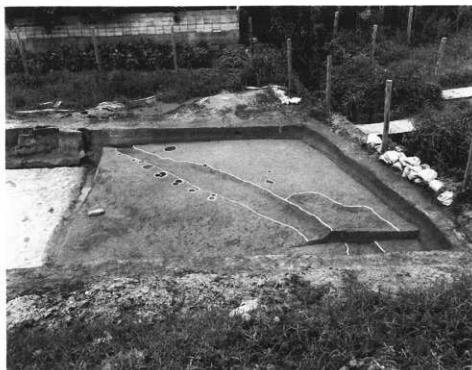
(1)E 1地区全景（東から）



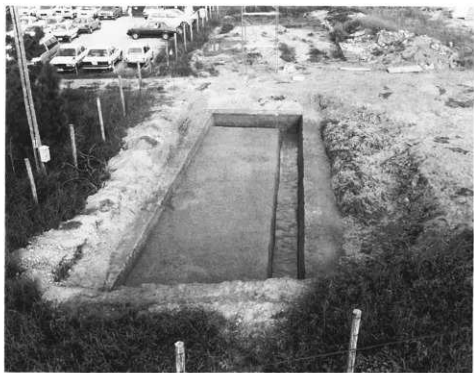
(2)E 1地区全景（西から）



(1) S R01 流路 B 土层断面



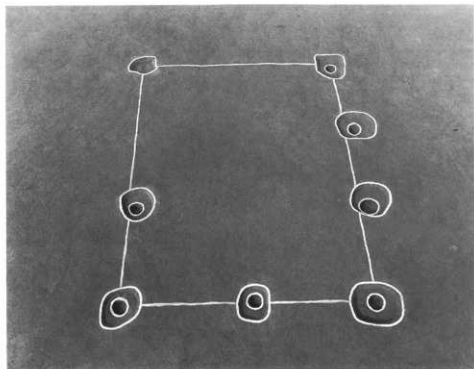
(2) S D12 · S A01



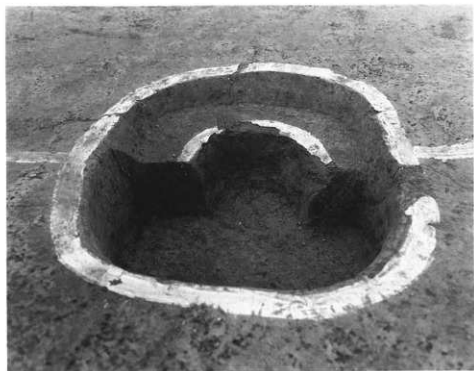
(1) E 2 地区全景 (西から)



(2) F 1 地区全景 (東から)



(1) S B01



(2) S B01柱穴断面



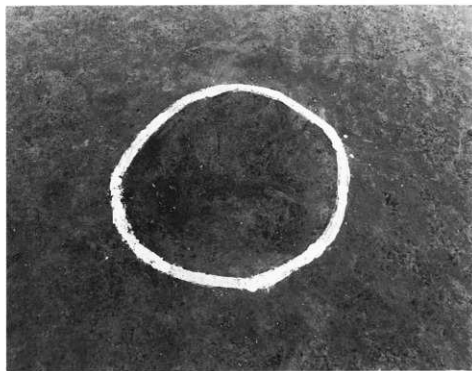
(1) F 2・3地区全景（西から）



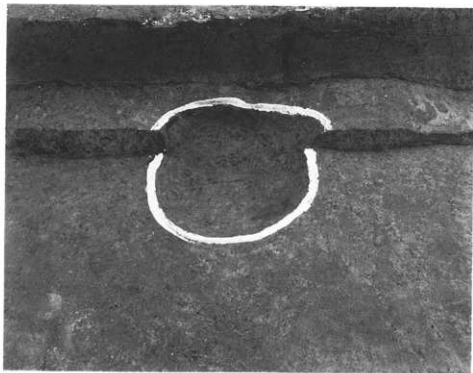
(2) F 2地区全景（西から）



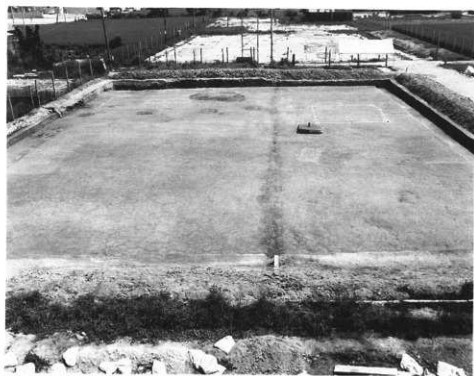
(1) S D 13



(2) S K 09



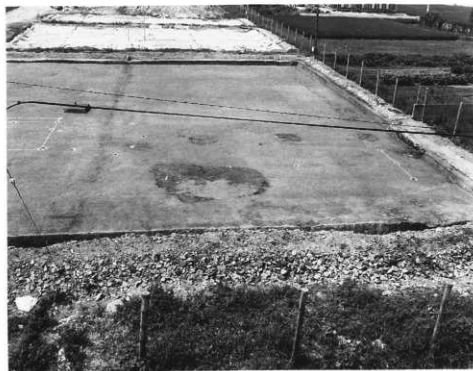
(1)SK10



(2)P3地区全景(西から)



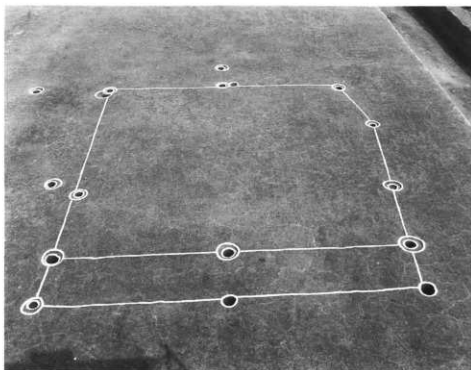
(1) F 3 地区全景 (東から)



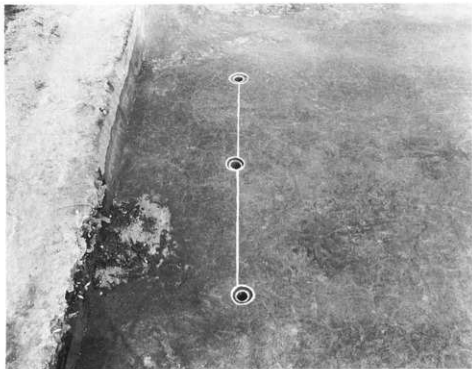
(2) F 3 地区全景 (東から)



(1) S B02



(2) S B02



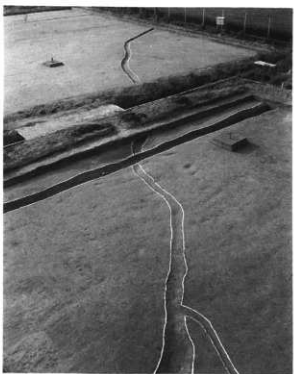
(1)S A01



(2)G 1地区全景（東から）



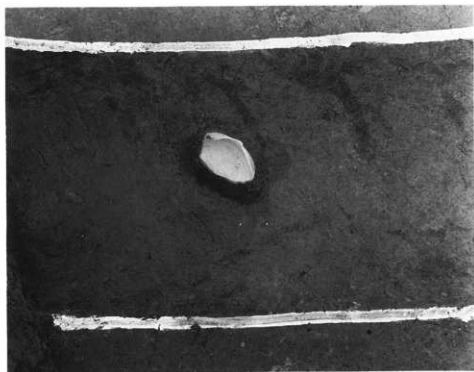
(1)SD14



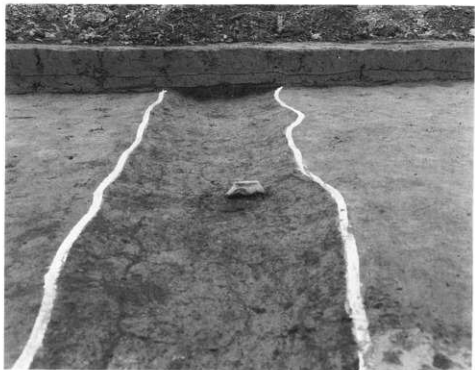
(2)SD15



(1) S D 15遺物出土状況



(2) S D 15遺物出土状況



(1)SD15遺物出土状況



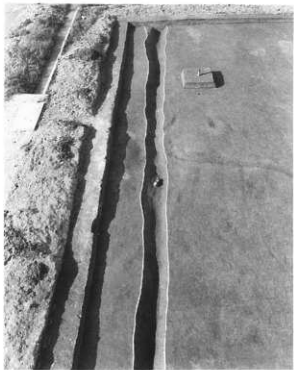
(2)G2地区全景(西から)



(1)G 2 地区全景 (東から)



(2)G 2 地区西半全景 (南から)



(1) S D 16



(2) S D 16土層断面



(1)S D18·19



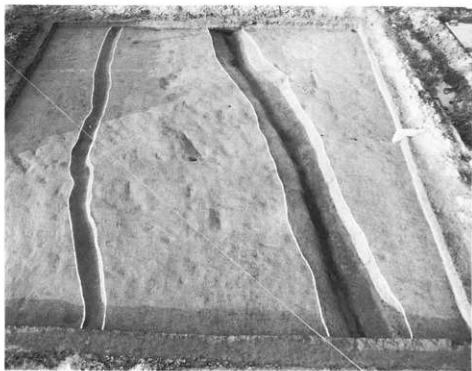
(2)S D19土層断面



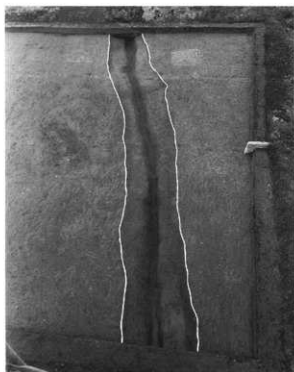
(1)S D18·19



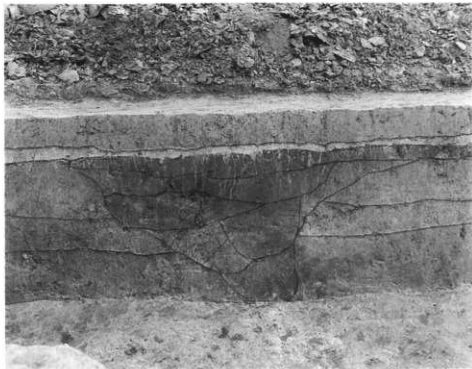
(2)S D19土層断面



(1) G 2 地区東半全景 (南から)



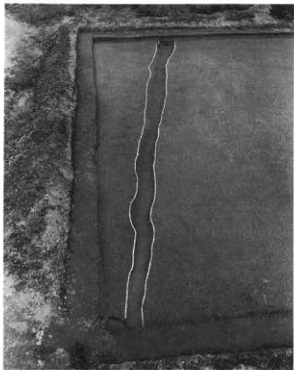
(2) S D21



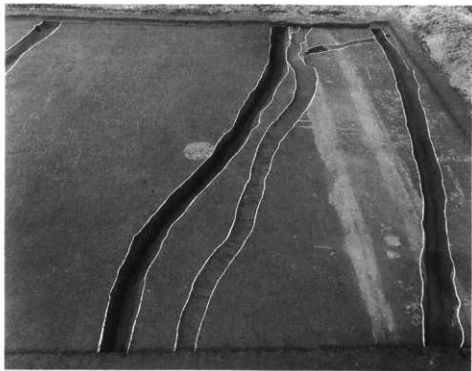
(1) S D21土層断面



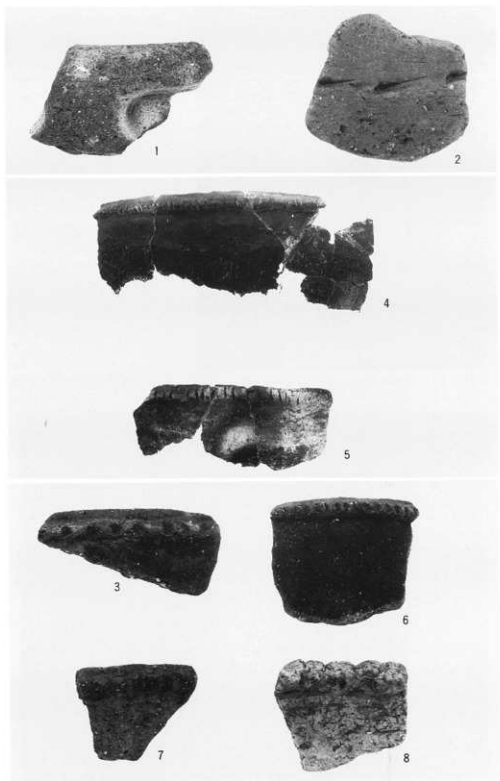
(2) G 3地区全景(南から)



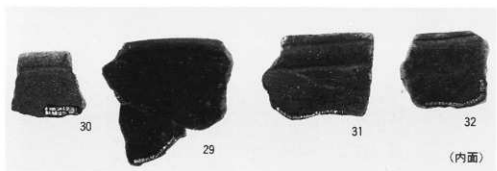
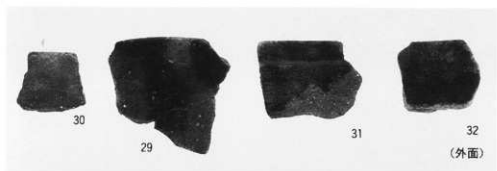
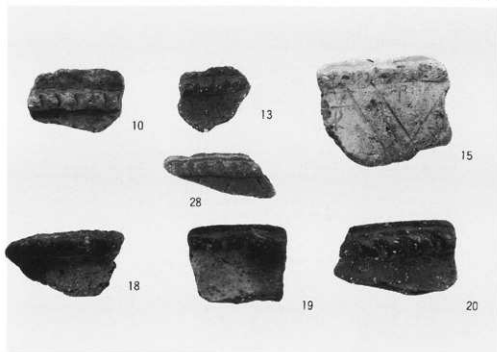
(1) S D 22



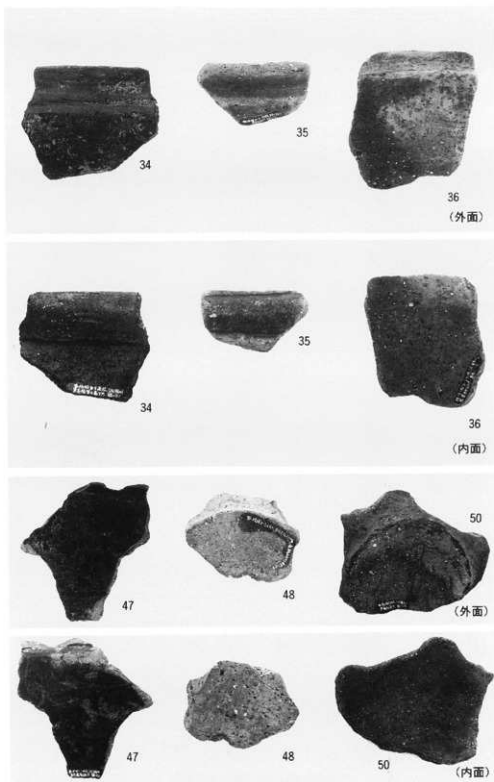
(2) S D 23 · 24 · 25



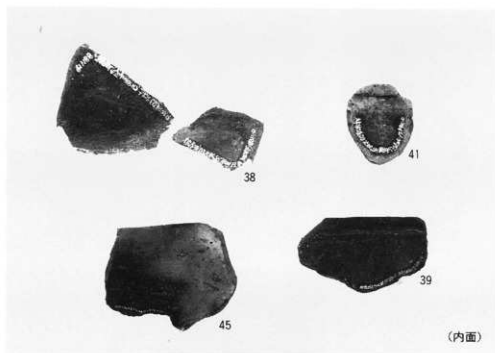
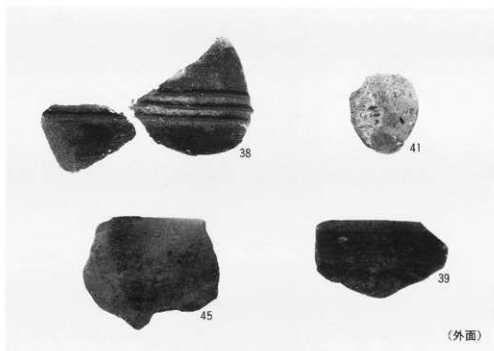
SR01流路A最下層川土遺物①



S R01流路A最下層出土遺物②



S R01流路A最下層出土遺物③

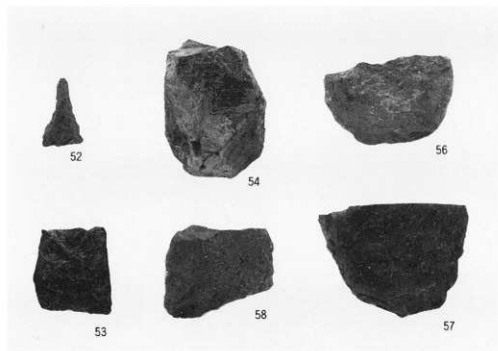
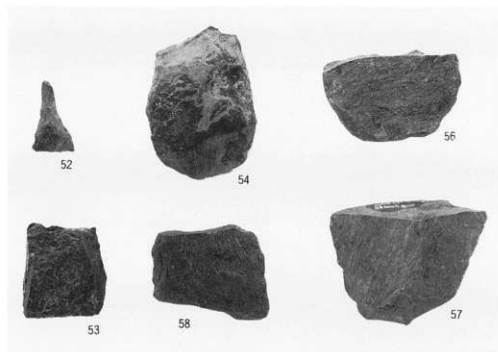


S R01 流路 A 最下層出土遺物④

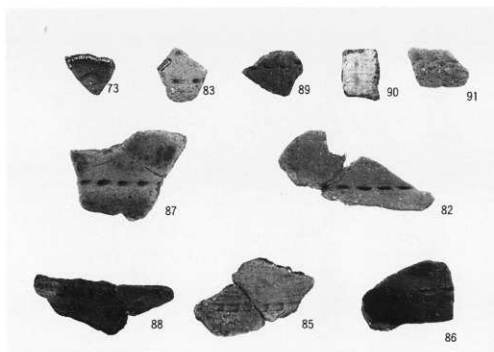
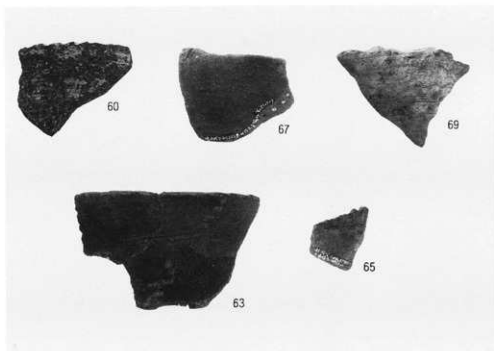


51





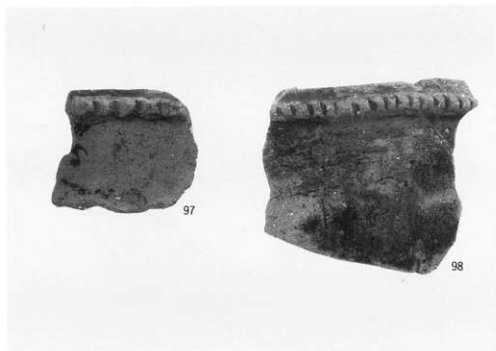
SR01流路A最下層出土遺物⑥



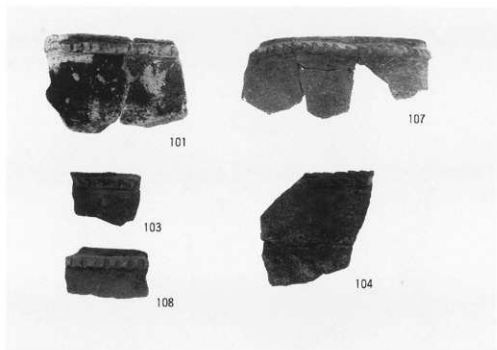
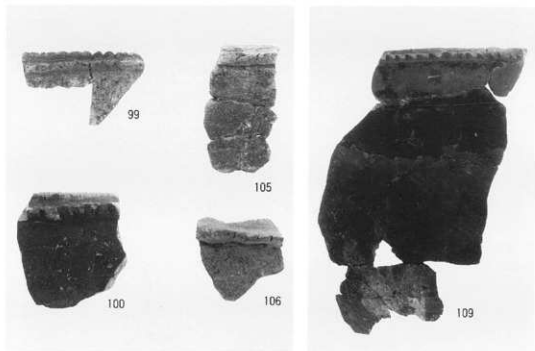
SR01流路A下層出土遺物①



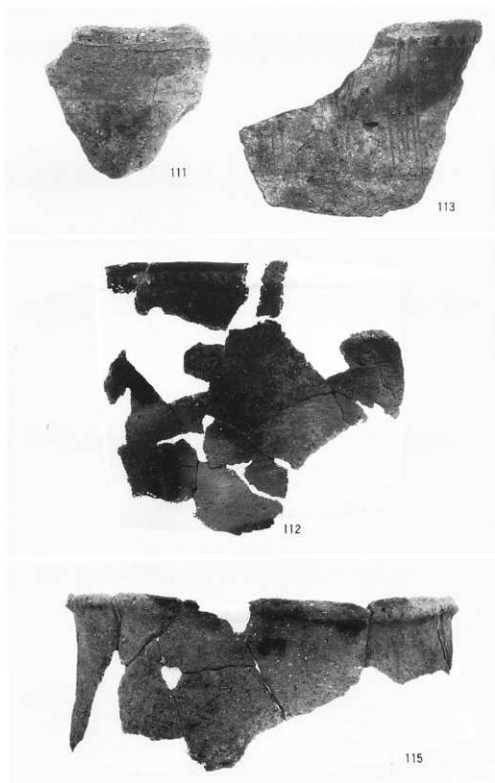
SR01流路A下層出土遺物②



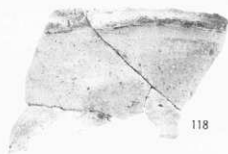
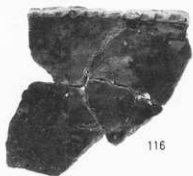
S R01流路A下層出土遺物③



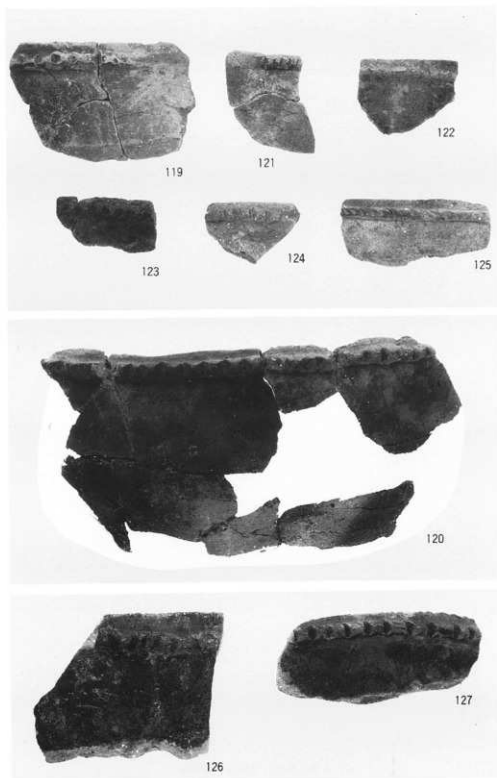
SR01流路A下層出土遺物④



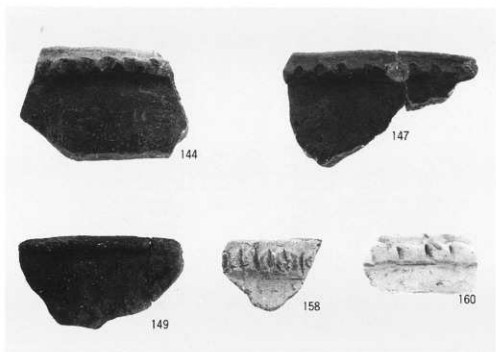
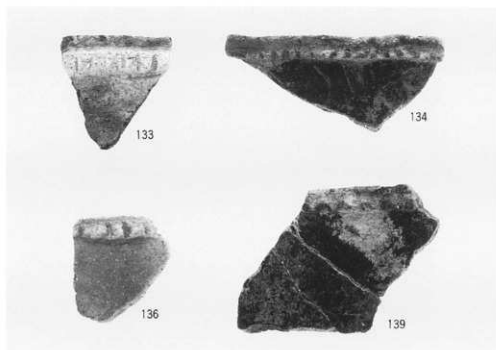
SR01流路A下層出土遺物⑤



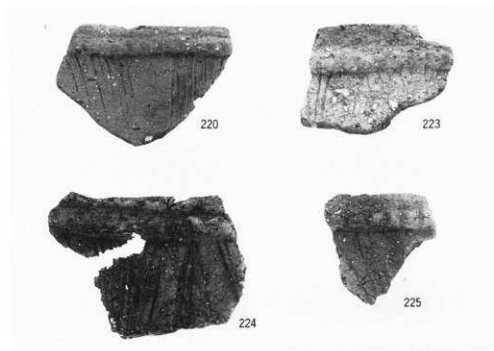
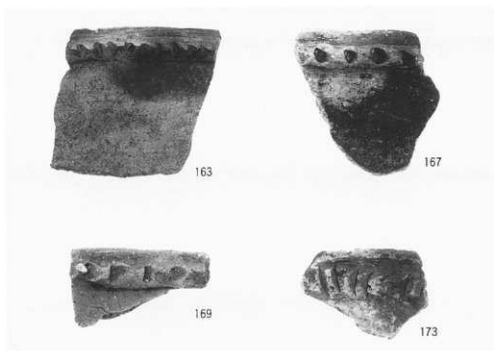
SR01流路A下層出土遺物⑥

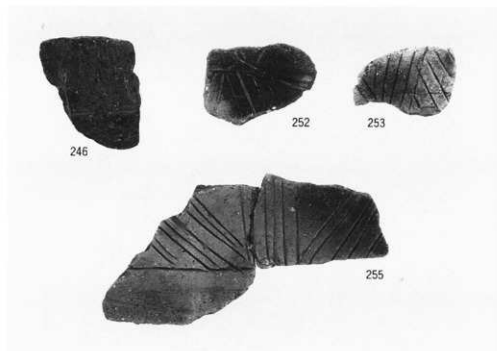
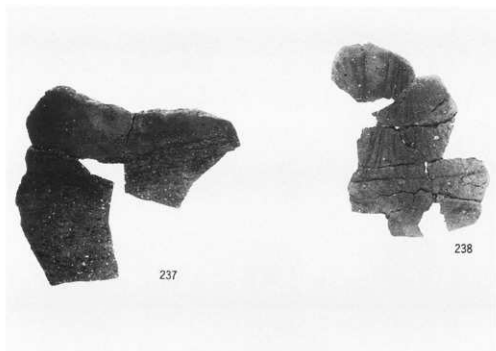


SR01流路A下層出土遺物⑦

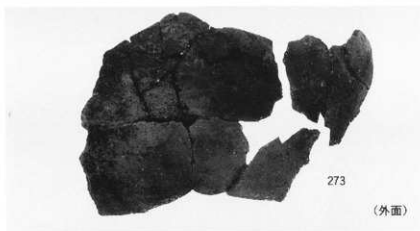
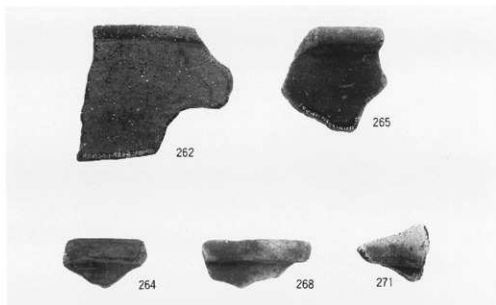


SR01流路A下層出土遺物⑧

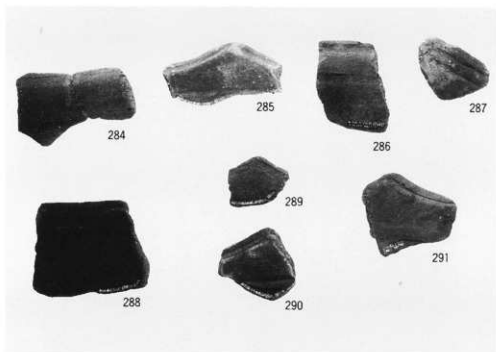
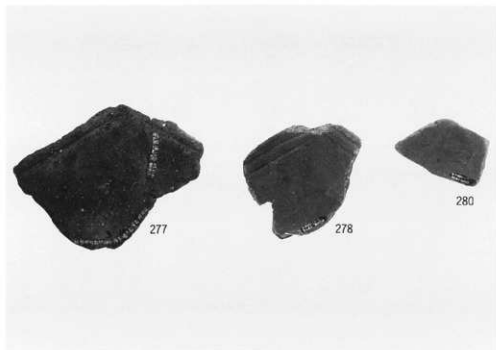




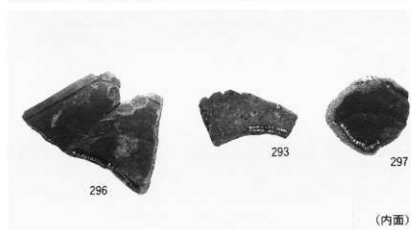
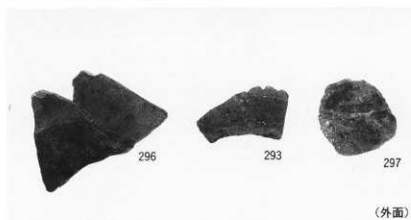
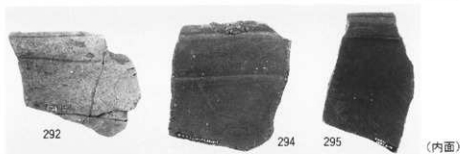
S R01流路A下層出土遺物⑩



SR01流路A下層出土遺物①



S R01流路A下層出土遺物⑫



SR01流路A下層出土遺物⑬



299



303



306



307

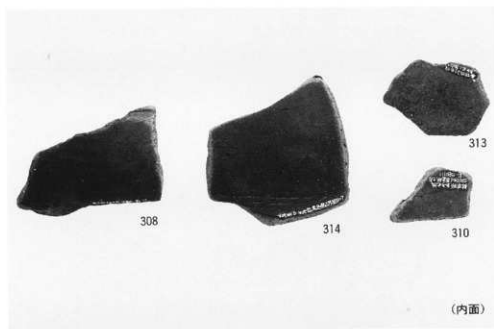
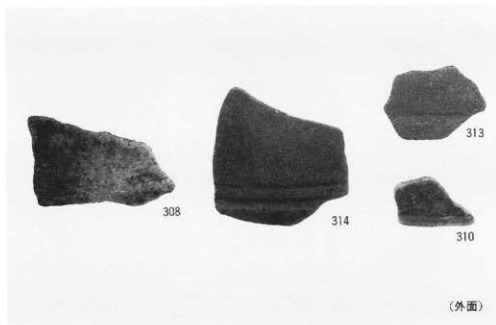
(外面)



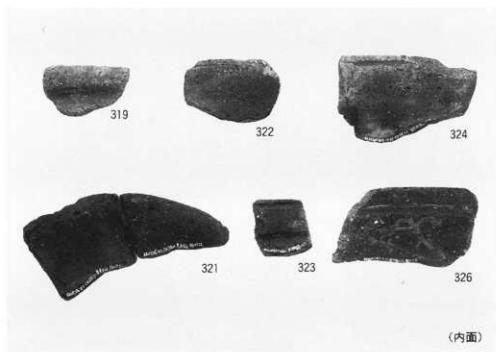
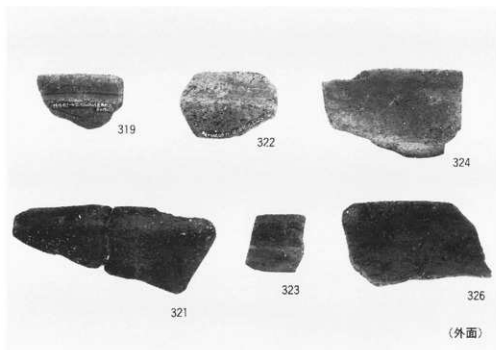
307

(内面)

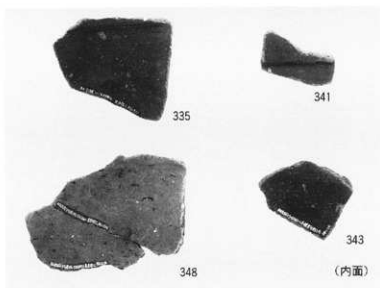
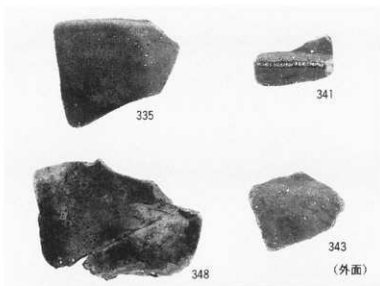
S R01流路A下層出土遺物寫



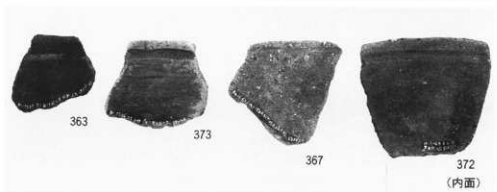
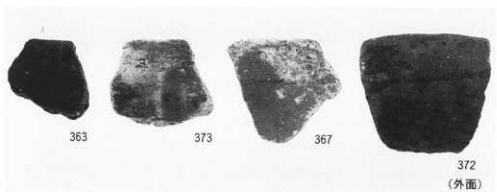
SR01流路A下層出土遺物寫



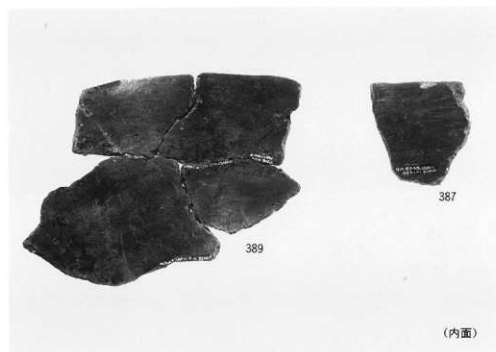
SR01流路A下層出土遺物



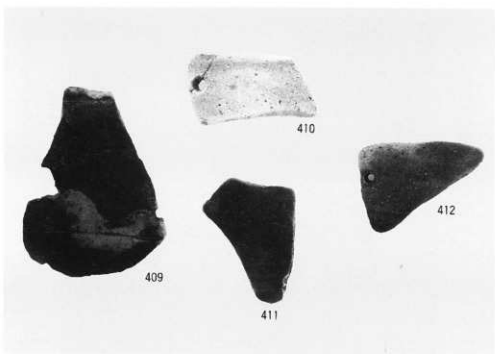
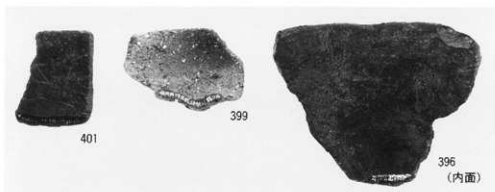
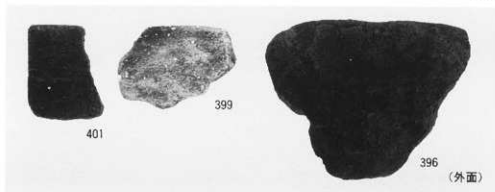
S R01流路A下層出土遺物壹



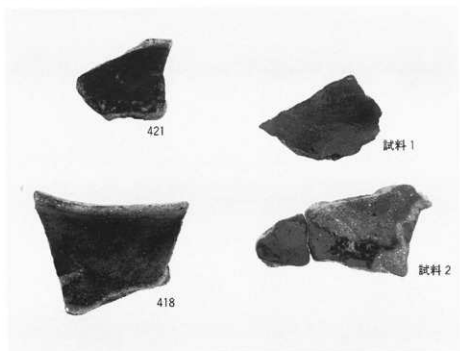
SR01流路A下層出土遺物③



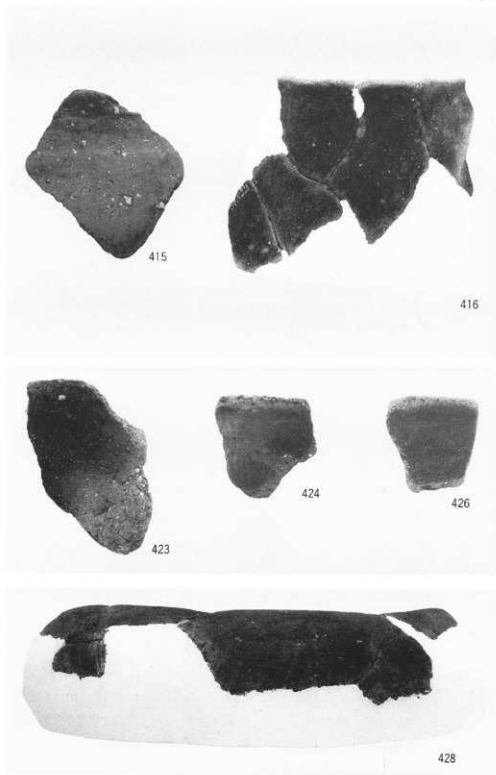
SR01流路A下層川土遺物⑨



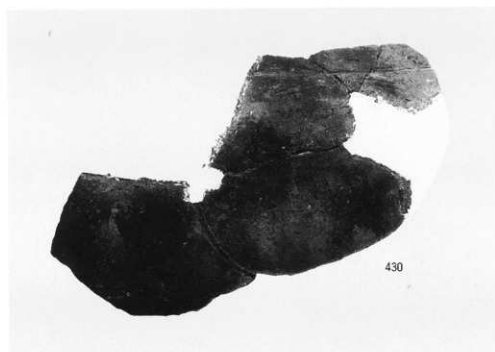
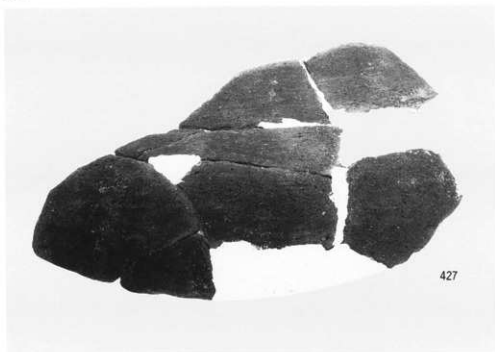
SR01流路A下層出土遺物②



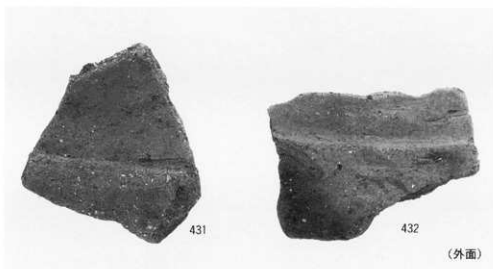
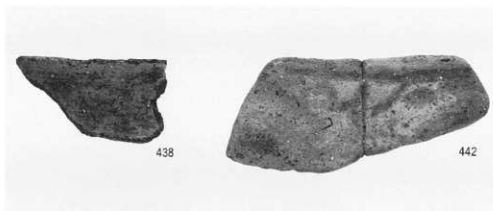
S R01流路A下層出土遺物群



S R01流路A下層出土遺物②



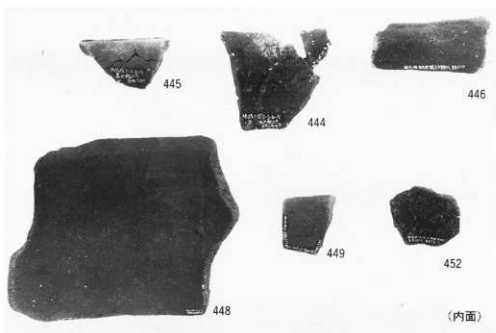
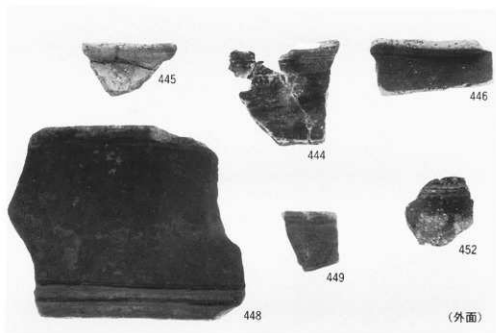
SR01流路A下層出土遺物②



S R01沈路A下層出土遺物③



S R01流路A下層出土遺物②

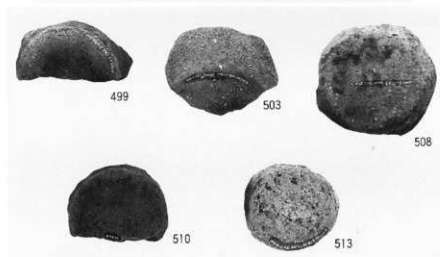
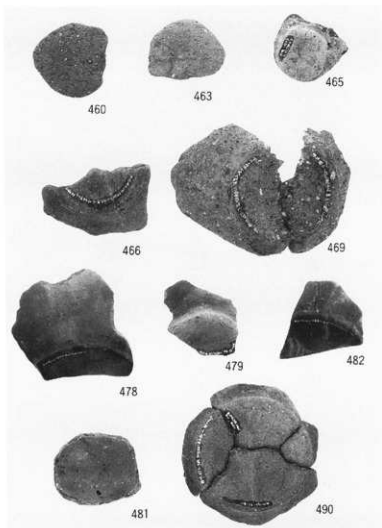


SR01流路A下層出土遺物⑤

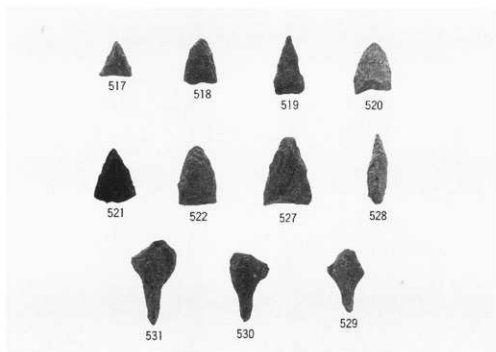
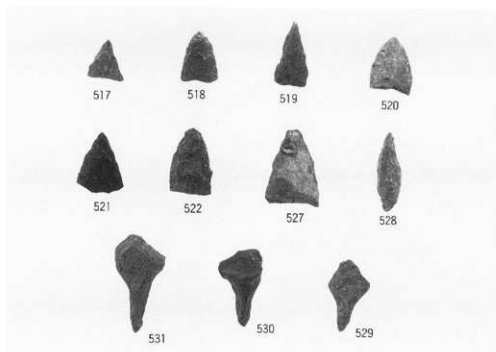




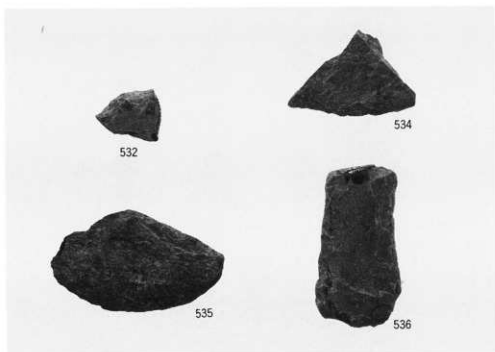
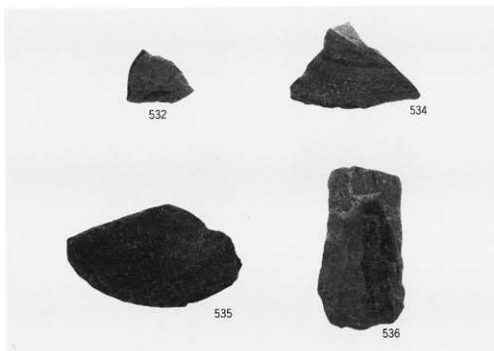
SR01流路A下層出土遺物⑧



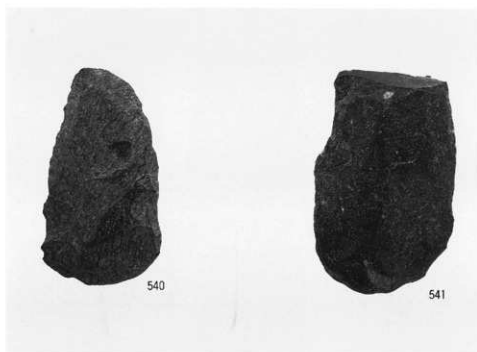
SR01流路A下層出土遺物③



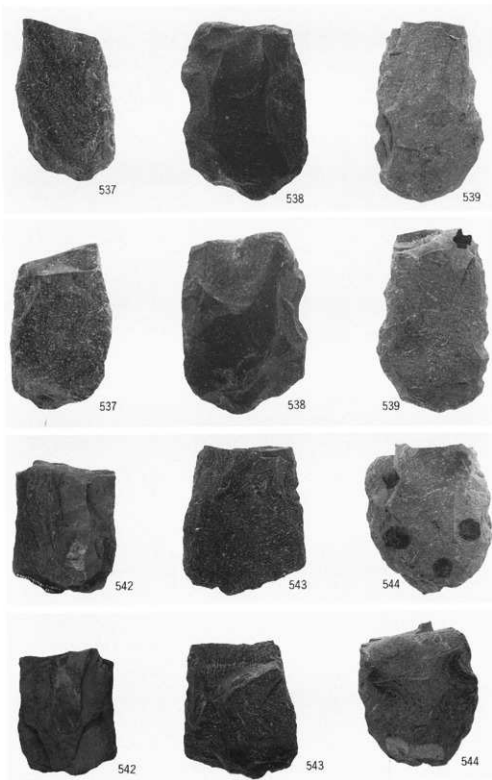
S R01流路A下層出土遺物⑨



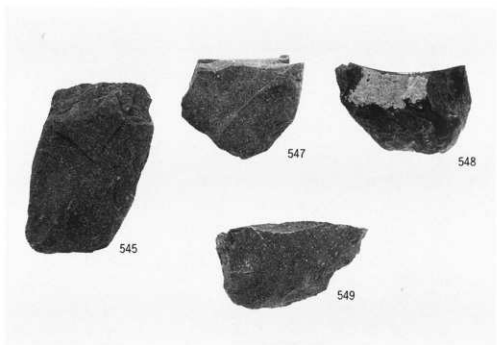
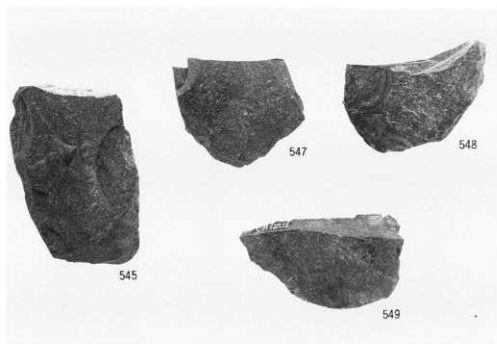
S R01流路A下層出土遺物⑩



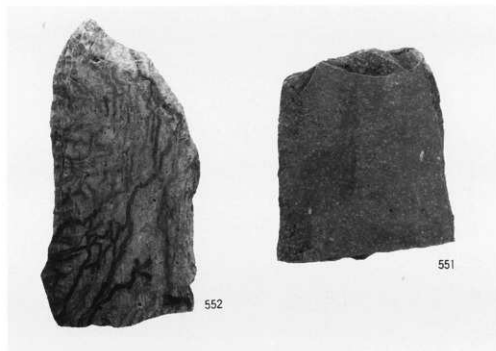
S R01流路A下層出土遺物㊸



S R01流路A下層出土遺物③



S R01流路A下層出土遺物等



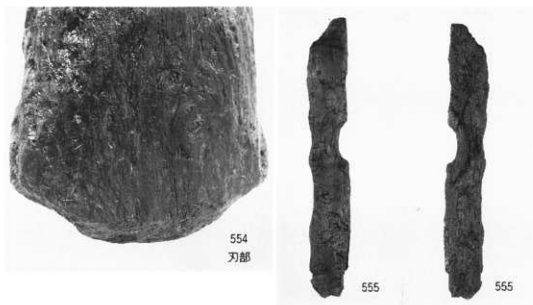
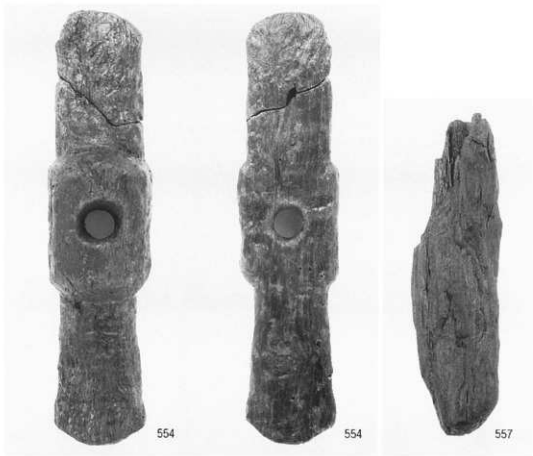
SR01洗路A下層出土遺物㊸

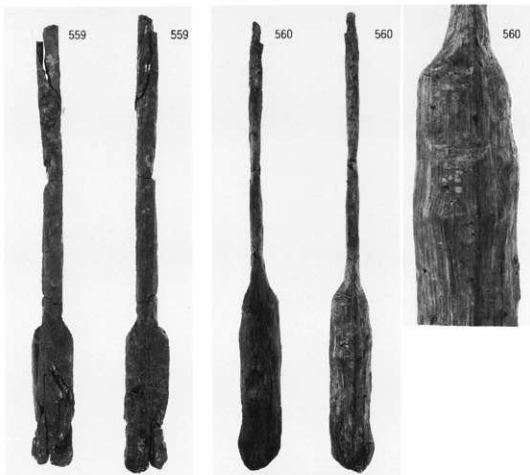
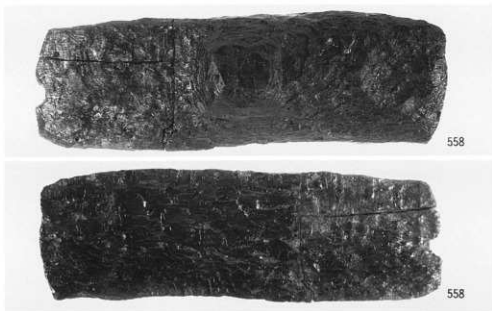


SR01流路A下層出土遺物⑤

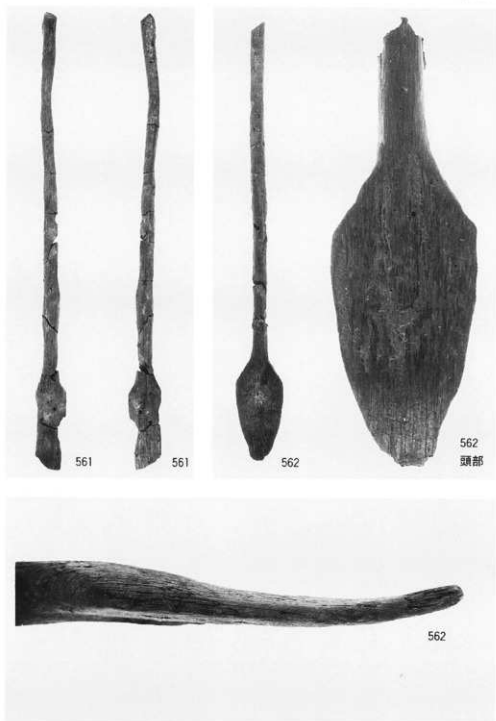


S R01流路A下層出土遺物③

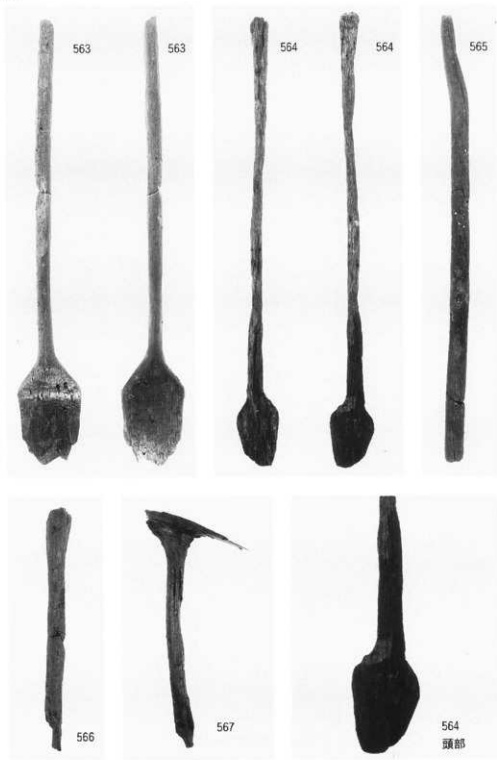




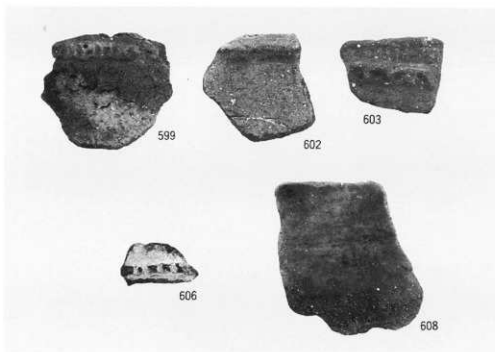
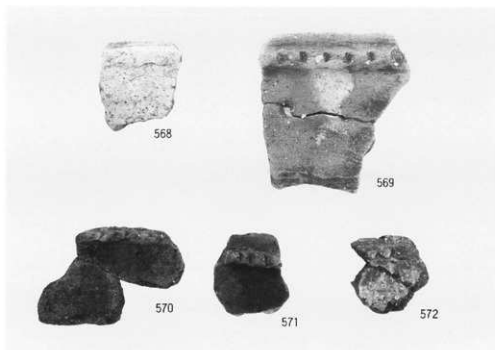
S R01流路A下層出土遺物③



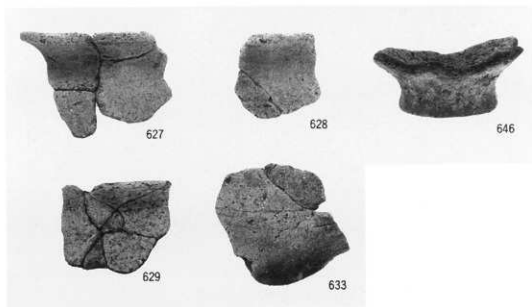
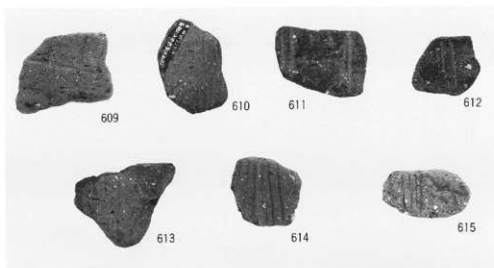
S R01流路A下層出土遺物筭

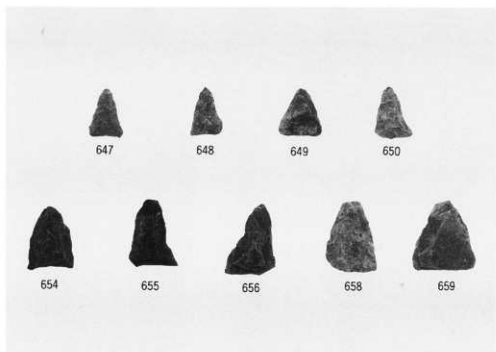
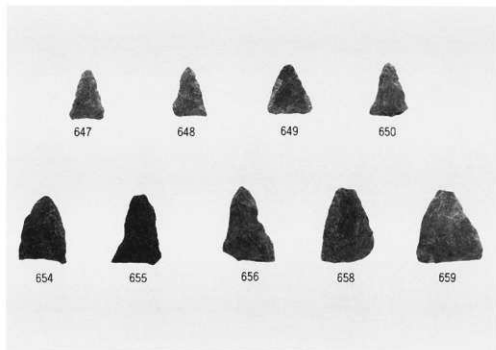


SR01流路A下層出土遺物④

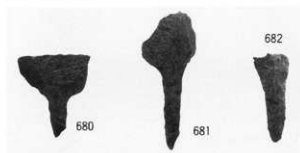
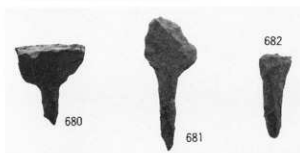
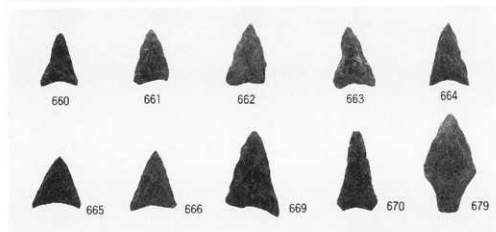
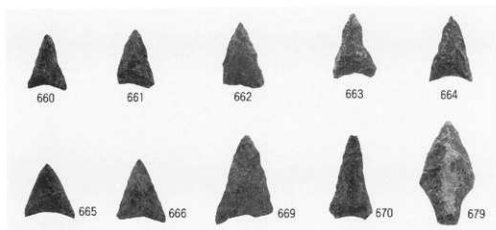


S R01流路A中層出土遺物①

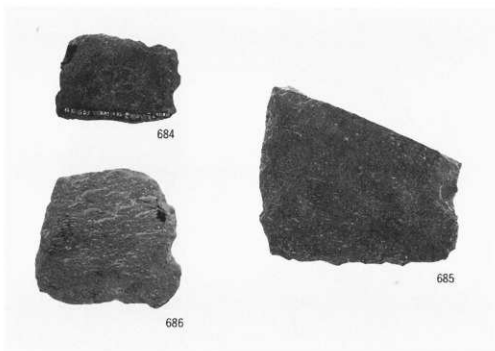
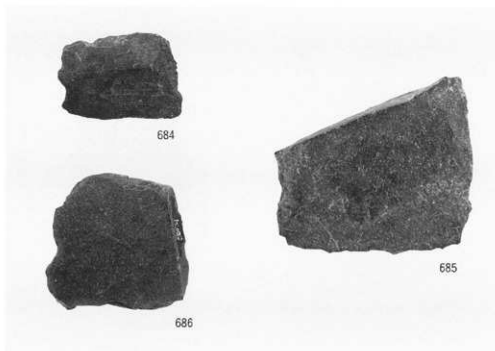




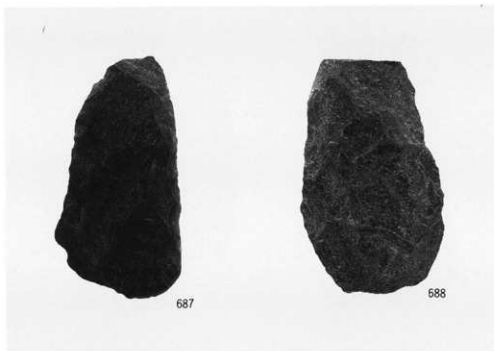
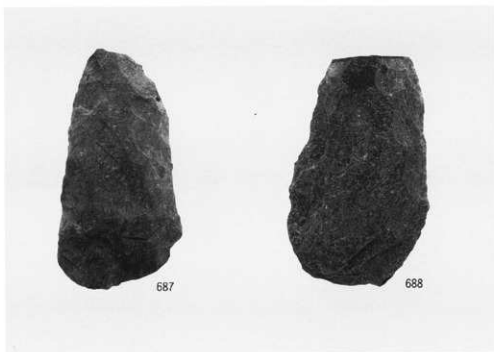
S R01流路A中層出土遺物③



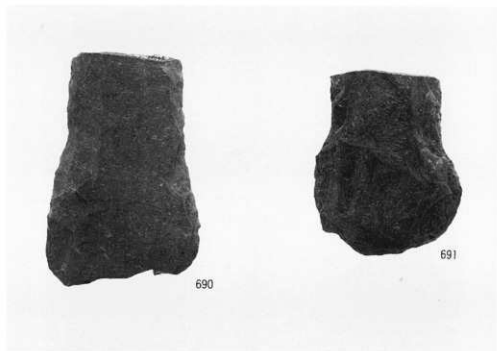
S R01流路A中層出土遺物④



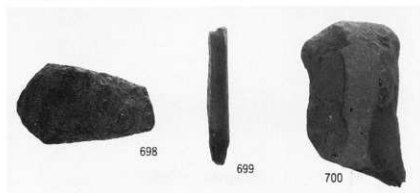
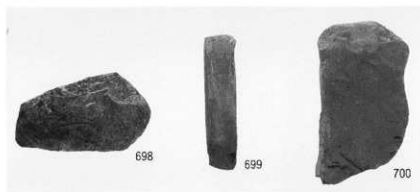
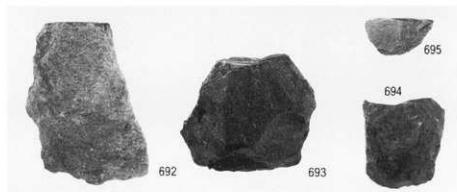
S R01流路A中層出土遺物⑤



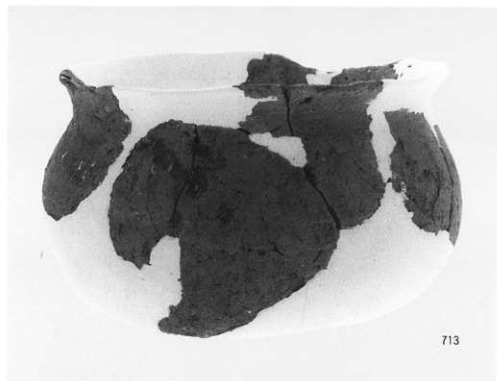
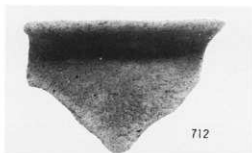
S R01流路A中層出土遺物⑥



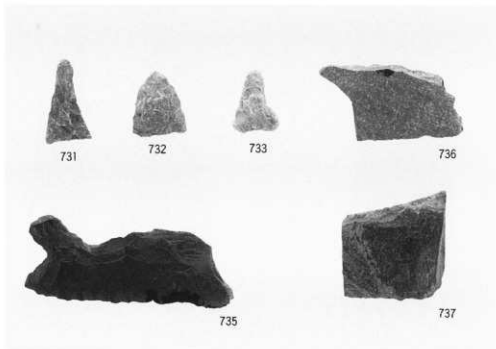
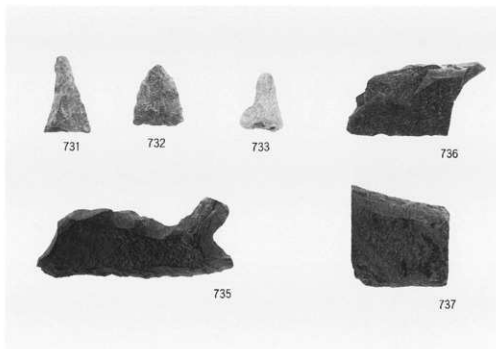
S R01流路A中層出土遺物⑦



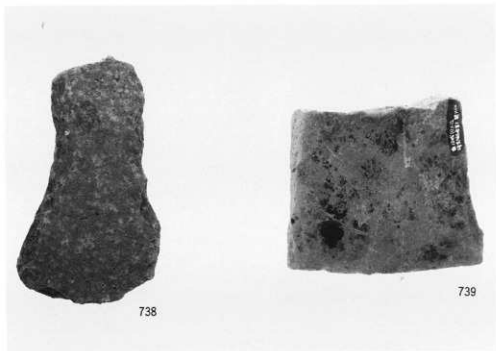
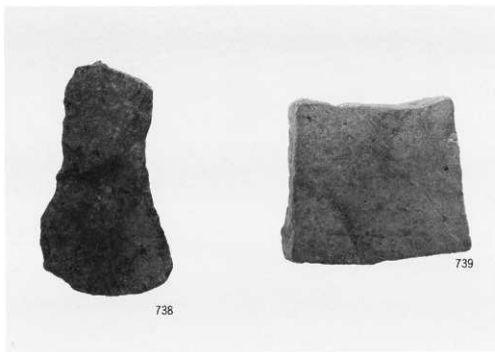
SR01流路A中層出土遺物⑤



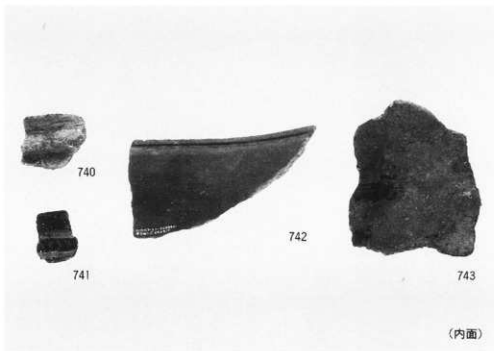
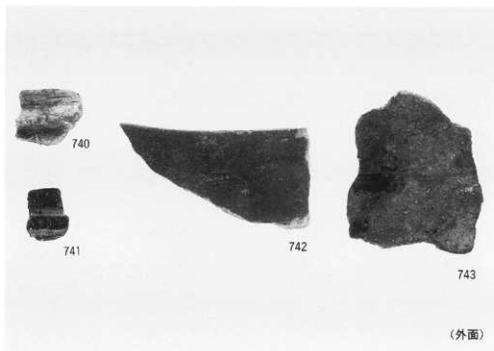




SR01流路A上層出土遺物③

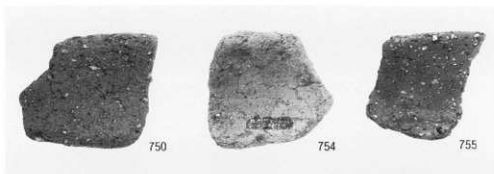


S R01流路A上層出土遺物④

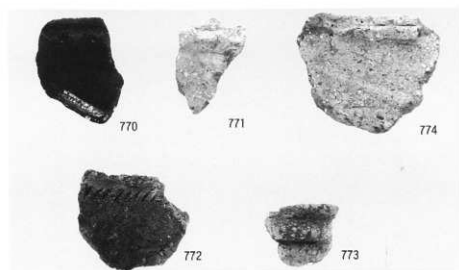
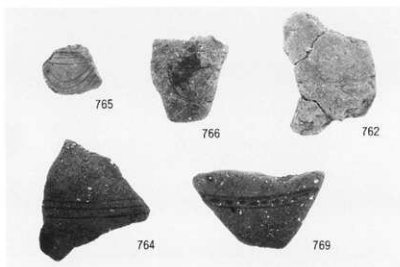
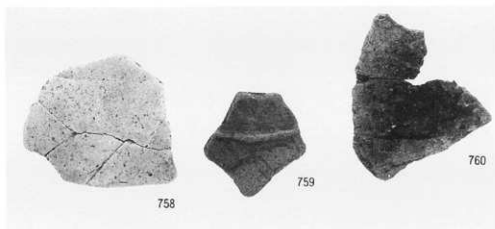


S R01包含層出土遺物①

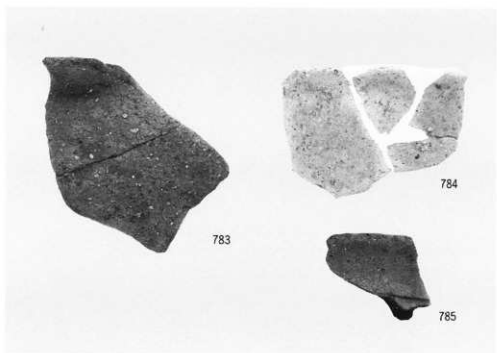
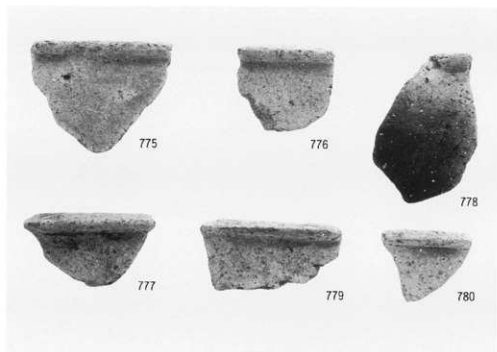




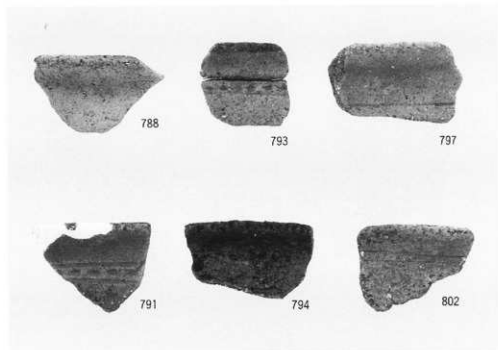
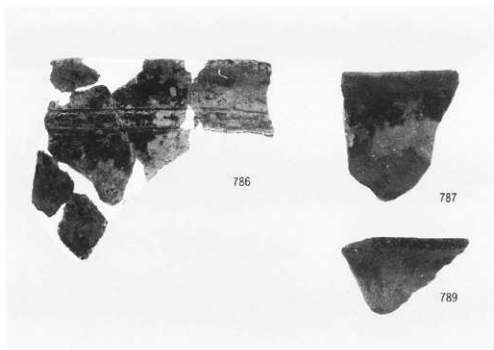
S R01流路B出土遺物①



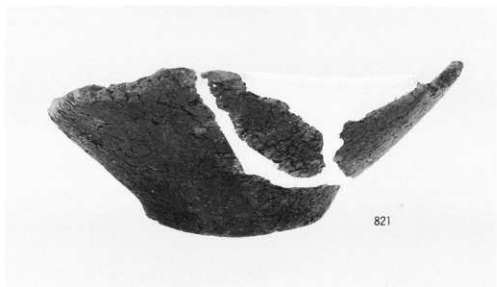
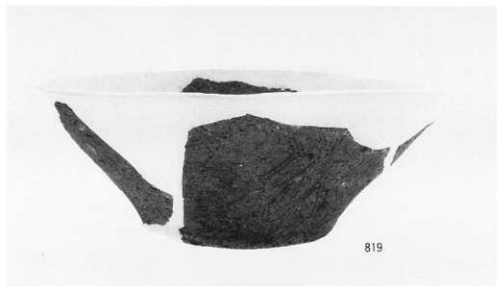
SR01流路B出土遺物②



S R01流路B出土遺物③



SR01流路B出土遺物④



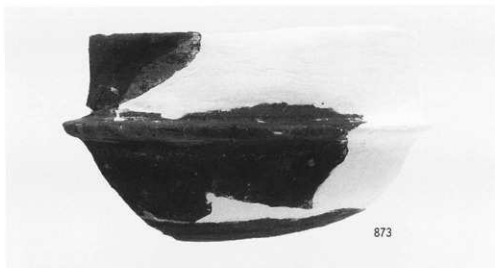
SR01流路B出土遺物⑤

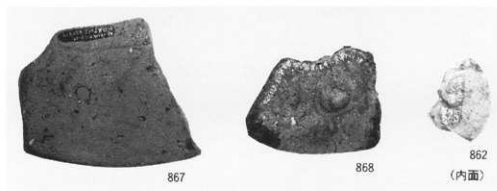


S R01流路B出土遺物⑥

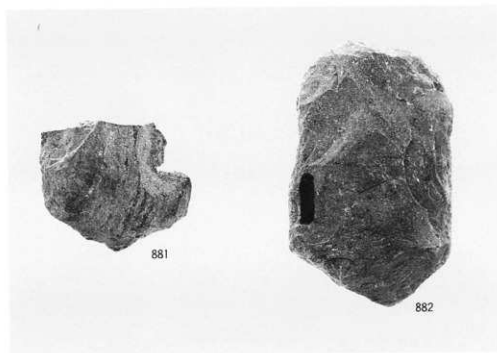
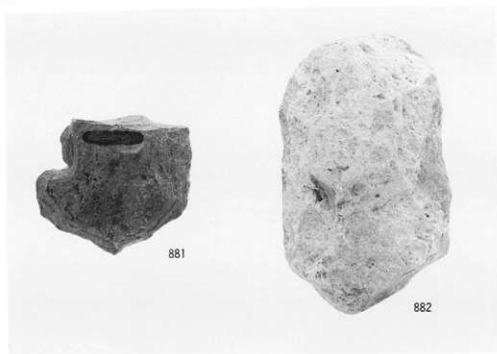


S R01流路B出土遺物⑦

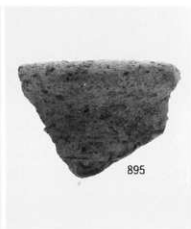
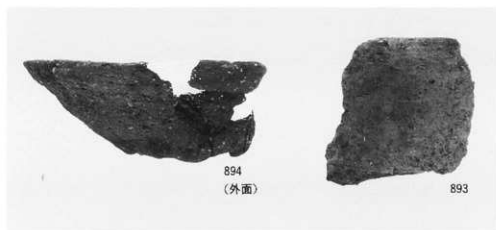
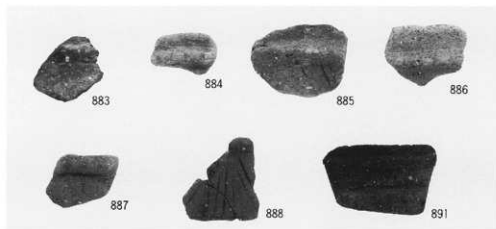


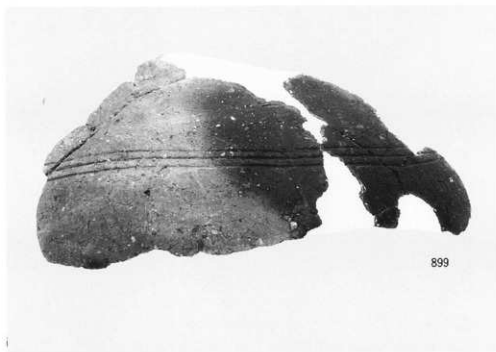
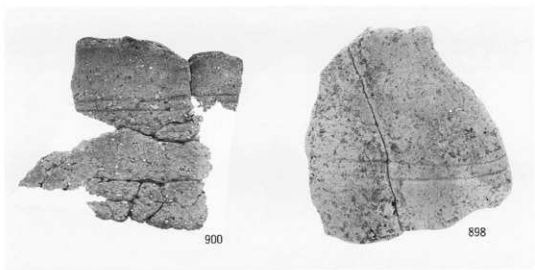


S R01流路B川土遺物⑨

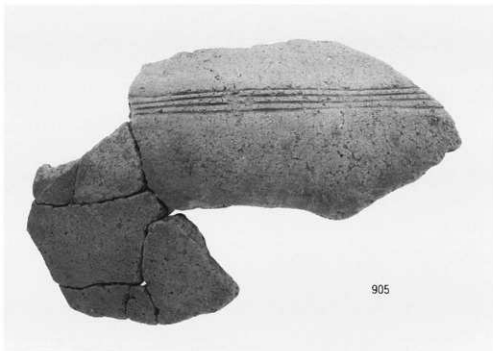


SR01流路B出土遺物⑩

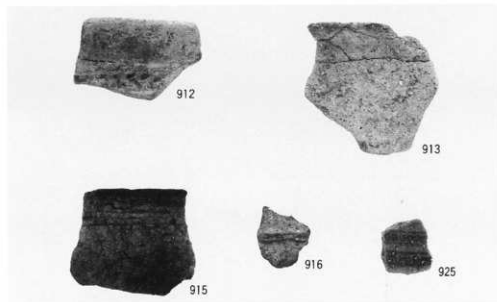
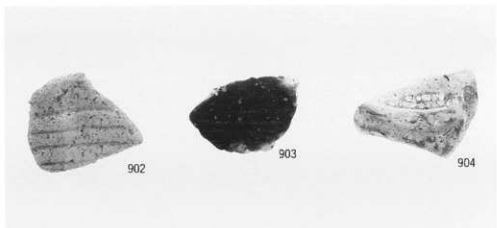


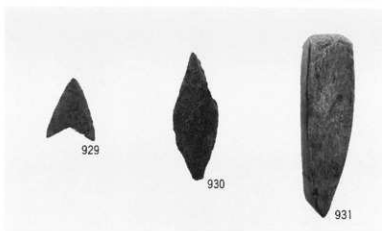
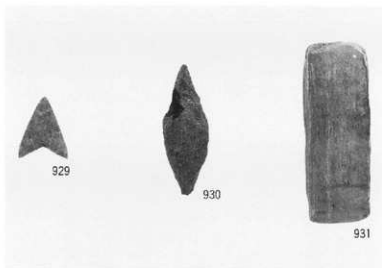


S D01出土遺物②

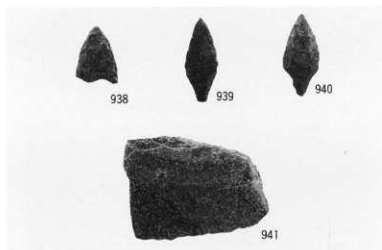
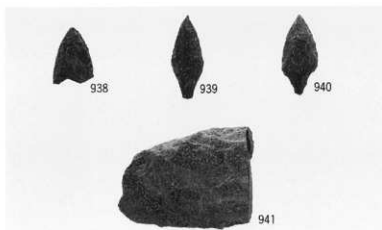
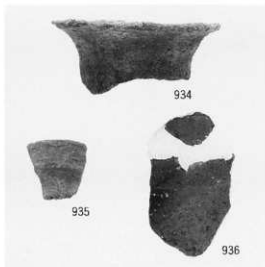


S D01出土遺物③





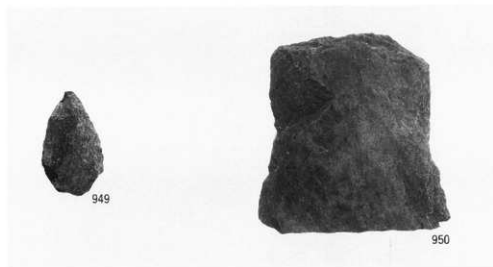
S D 01出土遺物⑤

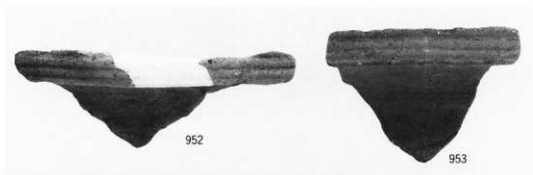


S X01出土遺物

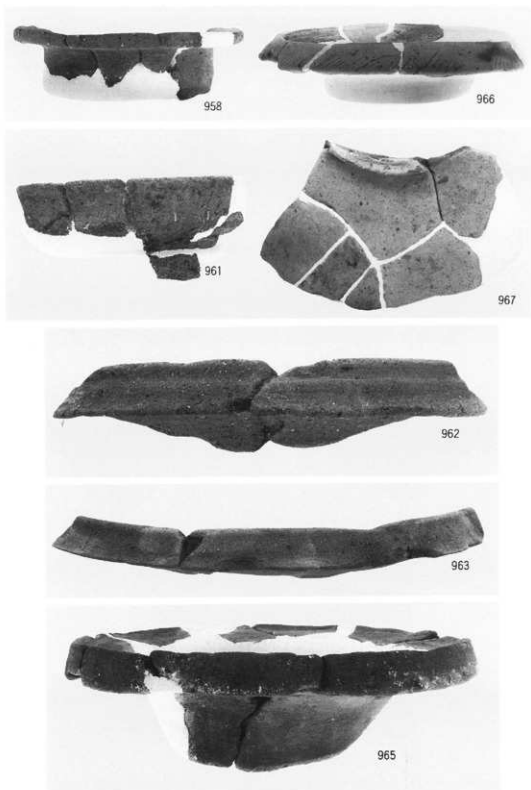


S X 02出土遺物①

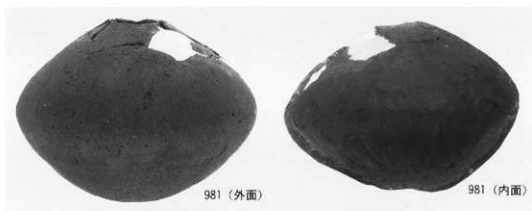
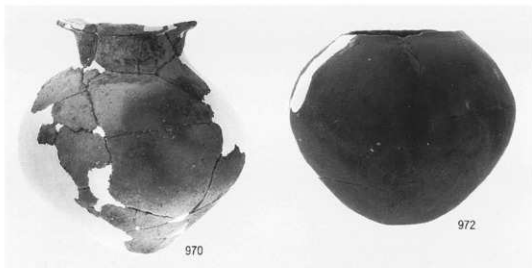




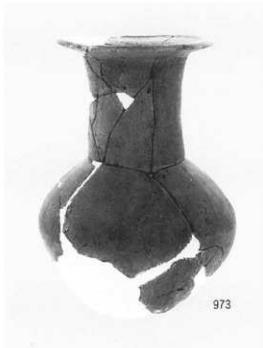
S X03出土遺物①

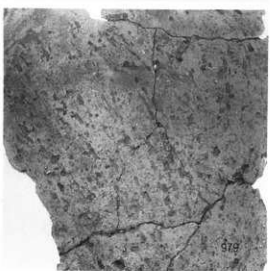


S X03出土遺物②

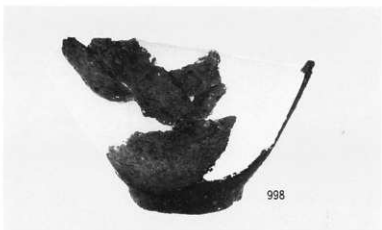
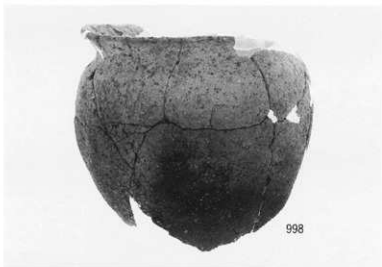


S X03出土遺物③

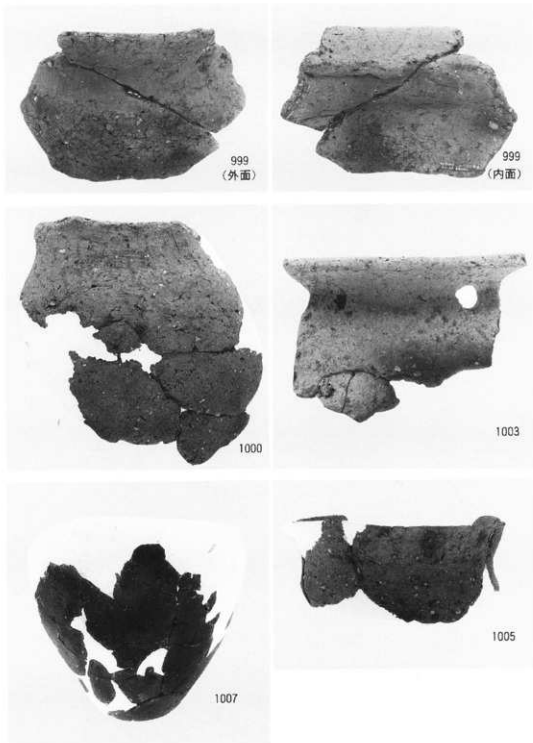


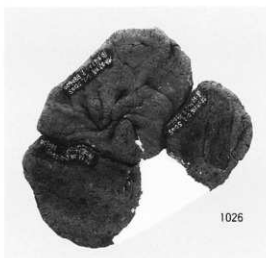
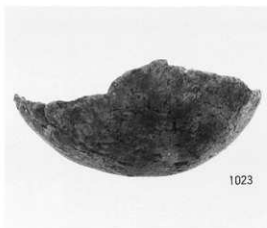


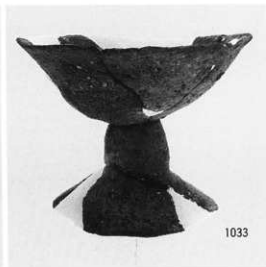
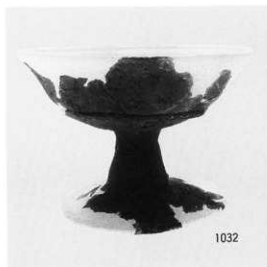


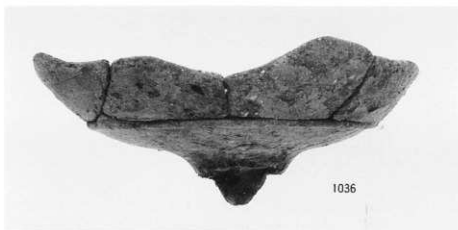
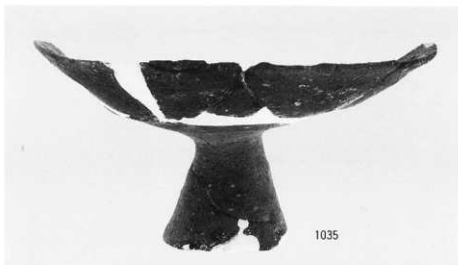


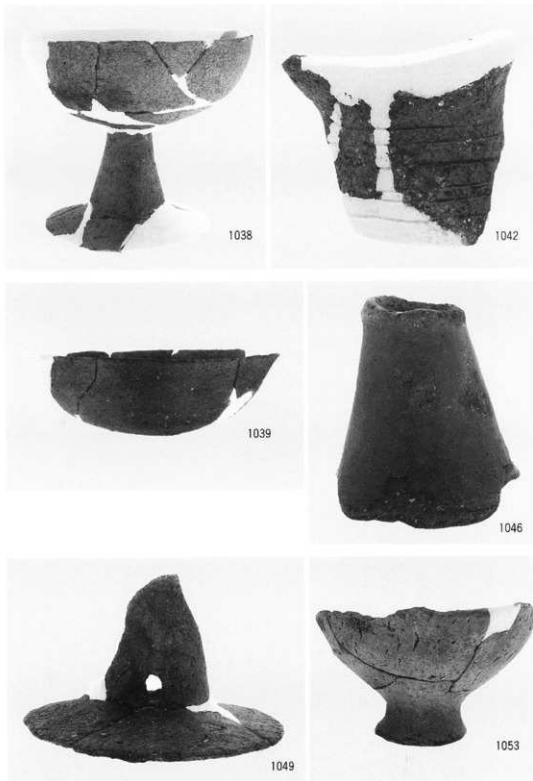
S X 03出土遺物⑦



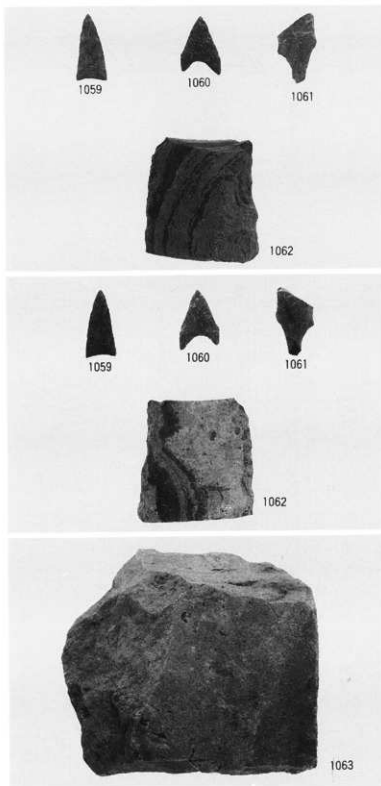




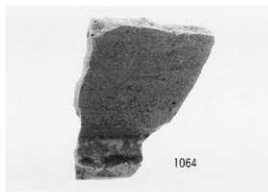




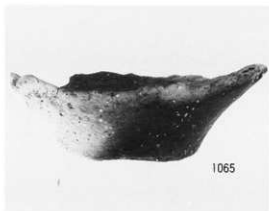




SX03出土遺物④



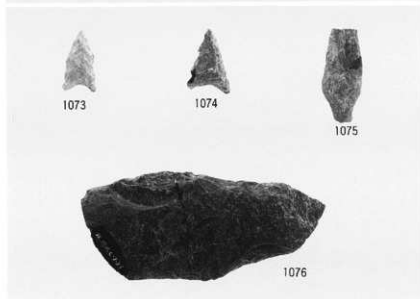
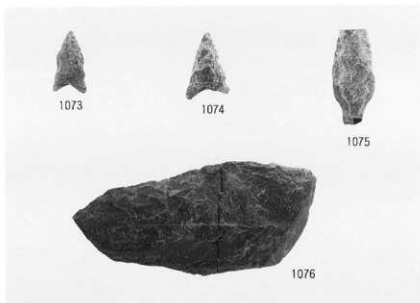
S D07出土遺物



S D15出土遺物



S D16出土遺物



包含層出土遺物

高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
第二冊

林・坊城遺跡

平成5年11月30日 発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
電話 (0877) 48-2191 (代表)

発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷 綿美巧社
〒760 香川県高松市多賀町1-8-10
電話 (0878) 33-5811